とある科学の世界改変

垂柳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある科学の世界改変

【Ｎコード】
Ｎ１９２５Ｑ

【作者名】
垂柳

【あらすじ】
とある魔術の禁書目録の二次創作です。

多数の転生者が介入したことにより物語は徐々に変化していく。
科学と魔術に異端が交わる時物語は改変する。

とあるプロローグ

「オイ！！クソガキ！！止まれツってんだろうがぁよ！！？」

ある路地裏の一角。表側、つまり一般の人間が出入りすることがない、いかにも犯罪が多発しそうな場所。そんなところを体中至るところに怪我をした一人の少年が複数の人間に追われている。追っているのは高校生ぐらいの者達で、顔には、苛ただしげに顔を歪めている者やしているものや、下種びた笑いを浮かべる者たちだ。

そして一人追われ、走っている少年。この俺、雨宮和樹である。

ここ最近は、こうして追われることが多くなり、それもあって今現在なぜ追われているのかもすでに憶えていない。まあ、たいした理由はないだろう。ああいう連中はいつも暴力の捌け口を探しているものだ。

体は、後ろの連中に先程連中にあちこちと殴られたせいでボロボロ、満身創痍である。それでも走るしかないのは、このままま後ろの連中に捕まれば、再起不能、襤褸雑巾の未来しかないからだ。

「…ッハ、ハ、…ハ……」

（……右…右、次を左で……）

後ろを見ず、ただ前だけを走る。”ここ”に来て無駄に良くなっ

た頭はこの入り組んでいる路地裏の道であっても僅か数日で把握しきっている。

ここであるならば今の体の状態でも後ろから逃げ切れる自信がある。現に聞こえてくる怒声や罵声もどんどんと遠くなっているのを感じた。

このままなら逃げられるだろう。

とりあえずは無事に逃げられそうなことに和樹は走りながらもほっと一息着いた。

それから数分経って、辺りから声が聞こえなくなった。

「ハァ……ハァ…ハ……。ここ、までは追って、来てない、よな…」

追ってくる気配がないことに和樹は安堵のためかその場にぺたりと膝をついた。

彼がいる今目の前にはいくつかのダンボールと、その他備品がちんまりと転がっている。そこら辺の普通の都市の路地裏ならさして珍しくはないだろうがここ――――――学園都市では珍しい光景である。

学園都市には警備ロボにより町は常に清潔にされているはずであり、本来ならこのようなものが放置されているはずがないのだ。

それでもこのようなものが放置されているのは、彼が故意にこの物品の回収をとめているからだ。

ここを彼は己の住処として使っていた。

町中のあらゆるところに設置されている監視カメラだがそれでも死角となるところはある。今彼がいるところもそうであり、おかげで誰かにとがめられたりすることはない。

もちろんそんなところに人が出入りするはずもなく、今周囲にいる人間は自分の目見る範囲では誰も居らず、ここに来てから手に入れた新しい感覚からもこの周囲にも人影は感じない。

「…ゴフ……」

喉から激しい吐き気に堪えきれず、思わずその場に蹲る。強烈な吐き気に、しかし口から出てくるものは、吐けども吐けども胃液しかないでてこない。

（……何で俺が…！？）

ここ数日彼は食べ物を全く口にできていなかった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

始まりは突然であった。今までどこか噛み合っていなかった思考が何の前触れもなくカチリとパズルのように組み合わさった。

それまで生きていくなか何をするのも考えるのも霞み掛かっていた頭が不思議なほどに物事をはっきりと読み取れるようになった。

それと同時妙に穴だらけの記憶も甦てきた。今一実感がもてないが、どうやらそれによると俺は転生をしたらしい。

穴だらけの記憶ではっきりとは思い出せないが前世の俺はごく一般的な普通の高校生だったようだ。

転生したさきの家もとくにこれといってないごく一般的な家庭。

ごく普通の家庭と日常。俺自身が前世の記憶があるということを抜かせば、どこにでもあるものだった。

自分が何故死んだのか、何故転生したのか、何も憶えてはいなかった。後に聞いたことだが、他の転生者の話によると何故転生したのかは分かってはいなかったが、死んだ記憶を憶えている人はちょうど半分ぐらいいた。何故、憶えてないかは分からないままだが、まあ、それは些細なことだろう。

さて話しを戻すがあのときの俺は転生したそこに不満があった。折角転生などと言った不可思議な現象にあったのにちっとも前世と変ったことが起こらない。そんなことを思っていた。

今にしてみるとまったくもってバカらしい考えだ。転生というものを経験したために自分が他よりも特別かなんかだと思い込んでいたんだろう。

まあ当時は、特に目標などがあった訳ではなかったが、俺は素直に転生したことを喜んでいたのだ。

そんなときだった。この世界がとある魔術の禁書目録という前世に読んだ小説の世界に転生したことに気付いたのは。

前世では関与した覚えがないその名前を聞いた時、前世の記憶が何故か疼いた。　それに疑問を感じながら調べたそこは俺を歓喜させた。

それに酷く俺は歓喜していた。自分が好きな話であった世界にいけたこともあるが、それ以上に前世からの憧れた異能、超能力を実際に使えるかもしれないということに俺は喜んだのだ。

それから俺は必死に勉強した。親に学園都市に入れてもらうことを許可してもらうためだ。もともと高校のときまでの記憶がある俺が周りで一番になるのは造作もなかった。それどころかこの体は中々優秀であるようで、断片的な記憶しかないが昔より数段頭が良かった。

それに気付いた時は喜んでいいのか、悲しめばよいのかかなり微妙な気持ちになったけど……

まあ、これは置いておくとして、とにかくそのことを自分が見ている限り、両親は喜んでいたと思う。
小学生に上がるさいにはむしろ両親に学園都市の入学することを強く進められた。

そして無事俺は学園都市にある小学校に入学することが出来た。
当初目に映る物全てが新鮮であったことは憶えている。

前世でも見たこともないようなもの、なにに使われるのか分からないような物まで、俺はいつも大人にませたガキだと思われていただろうその表情を崩し子供のようにはしゃいでいた。

だが、そんな日も長くは続かない。

親が失踪した。俺は親に捨てられたのだ。それを聞かされた時、何を言われているのか分からなかった。だが、今にして思えば両親の見る目はどこかおかしくはなかっただろうか？今となっては全く分からないことである。

この学園では親に捨てられる子供は珍しいことでもなかった。

いきなり“置き去り”になった俺に待っていたのは、帰る家も無い路上生活。本来ならどこかの施設に預けられる予定であった。が、俺はそこから逃げ出した。置き去りはこの学園都市ではろくなことにはならない。

周りからは白い目を曝されながら来たばかりで金もなかった俺は今日の糧を手に入れるため走り回る日々。当てもなくただ生きようと必死に足掻いた。

俺は呪った。何故俺がこんな目に合うのかと行き場のない怒りを抱えながらただそのとき俺はこの人生を呪っていた。

コツコツと足音が聞こえる。その音にいつの間にか眠っていた体を起こす。

おそらく事前の足音、又は未発達ながらの感覚から得られる情報から相手は複数いる。どうも近くまで来ているようであった。

こんな所普通の人が来るはずがない。もし不良ならまずいことになる。今までの経験上碌な事にはならない。あいつらは俺を見つけると嬉々として襲ってくる。実際このくらいを始めてから何度かあいつらの暴力の捌け口に何度も体を蹴られている。つい先程も同じようにやられたばかりなのだ。

こっちに来ないでくれ。祈るような気持ちでその場に蹲っていたが、現実は無常である。彼らは最初から俺がいるのか分かっていたかのように俺のいるところに止まった。

（やられる！！？）

くるであるだろう暴力の嵐に身構える。

その姿はあまりにも見っとも無く見えただろう。だが、今俺ができる畝一杯の行動はこの程度であったのだ。

「……？」

だが、何時まで立ても予想していた痛みが来ない。恐る恐る顔を上げてみたところそいつらは俺の予想していた人間とは違った。俺が寝床として使っていたそこに白衣を着た研究者が、後ろに幾人かの武装した人たちを背後に控えさせ現れた。

不良ではなかった。それに安堵の息を漏らせればよかったのだが、状況は俺の予想が当たっていれば不良が可愛く思えるくらいに最悪である。

白衣の男はこちらを興味深そうに観察してくる。その目はとても人と認識しているものに向けるものではなかった。

「なるほど、これは私たちにとっておもしろいモルモットとなりそうだ。……どうだ？私たちの下に来ないか？君はただ私がすることに黙って聞けばいい。そうすればこんなところではなくもっと楽な生活が出来るようになるよ。」

胡散臭い笑みを浮かべながら、そいつが開口一番に口に出したのはそんなことだった。

穴だらけの知識でもこの手の奴らに連れられればどうなるか知ってたから、…いや知っていたつもりだった。だから、俺は首を振った。

ここ数日、まともに暮らしていなかったためにまともに口を聞く体力すらない。ここに来るまでに受けた暴力の後がまだ治っていない。仮にソレがなくても、子供であるこの体で野外での活動は思った以上に負担がかかった。これでは逃げることは出来ないだろう。つまるところ俺には選択肢などないのだ。それでも首を振ったのはせめてもの抵抗といったところか。

「いやいや。一応質問と言う形式を取っているが君に選択肢はないよ。これは君がこの質問に対してどういう答えを出すかの観察だから。……それにしてもその目。諦めと達観が読み取れる、実にいい目だ。私とともに行けばどうなるか分かっている見たいだな？預けられる予定であった施設から消えたのもそのためか。この年齢にしては状況判断がしっかりと出来ているみたいだ。うん。君からは非常におもしろそうな匂いがする。」

つれてけ。

そんな軽く言われた言葉に後ろにいた人間は、返事することなく代わりにすばやく行動に移す。弱りきって動けない俺の首元に何か刺される。それから少しもしないうちにまぶたが急激に重くなった。

「やれやれ。時間は有限なんだ。早くソレを抱えたまえ。…ああ楽しみだ。キミは私に一体どんな可能性を見せてくれるのかな。早く実験を――――――」

そんな言葉を最後に俺は意識を失った。

そして、俺は――――――地獄を見た。

とあるプロローグ2

とある病院にある個室。そこに一人のカエル顔の医者がいた。彼は今ここに来る途中で買った紙コップに入ったコーヒーを片手、もう片方の手に持ったカルテを読み進めている。

今この医者が見ているカルテは、一生歩くことはできないと彼以外の医者が口を揃えて言った少年のものであった。

来週、そんな彼を手術することになっていた。

彼を知りえない周囲からは無謀との声の嵐。しかし彼はそれを必ず成功させるだろう。

冥土返し（ヘブンキャンセラー）

どんな絶望的な状況であっても諦めず、あらゆるものを利用してきた彼何時しか誰かがそう呼んだ。

死の淵からも生還させると言われるこの医者からすれば、この程度の患者は五万と見ているし、彼にしたらこれ以上に難しい手術など山のように行っているのだ。彼の腕からしたら簡単すぎるものだろう。

だが、彼がそれで慢心することはない。どんなことがあってもこの患者のために自身のできる最高を持ってあたっていた。

その時も彼は、少年の手術について考えを整理するため一人で専用にあてられたこの部屋で物思いにふけていた。

彼以外はこの部屋には居らず、訪れる者もいない。だがそんな誰もいないはずの個室に

ガキリ、と。

唐突に彼の後頭部に拳銃が当てられた。

それによりカエル顔の医者の動きが僅かに止まる。が、そこから騒ぐような愚かな真似をはしないかった。

彼は冥土返しなどと呼ばれる以前から相当な修羅場を潜っており、それ相応な闇も見ている。そんな彼にとっては拳銃を向けられるのは日常茶飯事とまではいかないものの珍しいことではなかった。まあ、最近ではこのようにされること事態は少なかったが。

故に彼は取り乱すようなことはせず、眉だけを僅かに動かしただけで、すぐ冷静に相手を観察し出方を窺った。

すぐに殺さなかったということは何かこちらに要求又は何かしらの目的があるということである。

相手はこのようなことに慣れていないのか、聞こえてくる呼吸はかなり息遣いが荒い。相当緊張、興奮しているのが読み取れ、彼は相手を場慣れしていない素人と判断した。

「…動くな。少しでも動けば殺す……。」

耳に入ってくる声に覚えはない。この時点で彼が過去に治療したものではないことが明確なものになった。彼は過去に治療した人の

名前を忘れることはない。

「…誰かな？生憎と僕が今まで治療した人ではないようだけど…。それとも僕に治療して欲しいと言う患者さんかな？」

「…お前に質問を許した覚えはない。…まずはこちらの質問に答えてもらおう。」

おどけたようにしながら、軽く探りを入れてみるがやはり、簡単に答えてくれるはずもなく逆にこちらの発言を制限されることとなった。

背後に立っているのは恐らく声からして男、それも少年と言っていいだろう。彼は緊張をほぐすためか深呼吸を一つ大きく溢し、再度銃を意識させるかのように医者の頭に強く当てた。

「まずは一つ。…お前は冥土返しか？」

「…確かに周りからはそう呼ばれているね。」

感情を押し殺すように放たれた言葉に現状から下手なことをいえないと判断した医者は、素直に頷く。

「……そうか。」

その反応に少年は再び乱れそうになる息を唾を飲み込む事で何とか抑える。

「――――――お前は過去……この学園都市の長、アレイスターを治療したことがあるな？」

次が彼の要求だと予想を付けていたが、問われたその質問に目を大きく開かせた。

「なんのことかな…。」

「質問には正直に答えるのがお互いのためだろう。ちなみに質問と名を打ってはいるが、お前が冥土返しであるのなら、これはただの確認作業だ。」

その言葉にすぐに返答することが出来なかった。

「…沈黙はイエスと捕らえる。」

後ろにいる声の主はカエル顔の医者の様子に自身の言葉に確信を強めた。

「……何故、…君がそれを」

「答える必要はない。」

つい口からこぼれてしまったその問いにやはり後ろの少年は答えない。

「では、次が俺の要求だ。お前の持つ『窓のないビル』にいるアレイスター・クローリーの生命維持装置。その遠隔装置を渡せ。」

今度こそ彼は息が止まった。誰も知るはずのないトップシークレットといっていい情報をこの少年が知ることにただただ混乱する事しか出来ない。

「……君の狙いはなんだい？」

「…アレイスターとの対等な条件の基での交渉。それが俺の目的だ。」

冥土帰しの背後にいる少年、和樹は緊張で渇いていく喉を唾で湿らせながらゆっくりと口を開いた。

彼らがあそこから逃げ出したとき、彼が今の自分たちが追っ手から助かる方法を考えた結果これしかうかばなかった。

過去あらゆる原作キャラがそのことごとく失敗してきた方法。だが成功すればこの後の一切の憂いが消える。

彼らが研究所から逃げ出した後、当然来るであろう追っ手を恐れ、なるべく遠くまで逃げようとした。

だが逃げるのも限界がある。彼の能力は闘争などの手段では上位に入るものではあるが、長期的に続く逃亡生活とはそれだけ身体、精神ともに負担が掛かる。

とりあえず研究所から逃げ出した彼らは、疲労により長時間の行動は不可能と判断し、ある廃ビルの中に一時休息をとることにした。そこで彼は、自身と逃げた連れを休ませながらこれからについて考えた。

だが考えども浮かぶのは最悪の結末の数々。優秀とされる演算でもなにをしたところでいずれは追っ手に捕まる未来しか浮かばない。

例えば学園都市から逃げ出すというのも考えた。外を出ること事態は自身の能力からいって簡単に成功するだろう。

だが、この学園都市を出たところで今の彼らに行くあてなどどこにもない。まだ子供である自分たちが外に逃げ出したところでまともな生活は送ることは出来ないだろう。それに学園都市から能力者が逃げ出したとあれば連中は血眼になりこちらを探し出し、そうなればいつか必ず自分たちを捕らえられる。

アンチスキルに頼る？却下。連中が本気で俺らを捕らえようとすれば所詮学園都市にある一部所でしかないアンチスキルは頼りにならない。

そうして悩んでいた彼が最後に浮かんだのがこれだ。原作知識を利用した知識を利用し、アレイスターと交渉。そしてこの穴だらけの知識で、相手と常にこちらを優位に立たせるという点においてこれが最も優れていると判断したのがこれである。

何とか残っていた記憶の一部。その中でも確実に優位を取れるだろう手を。

「こちらに渡していただければ、ここでお前を始末することはない。…素直に渡してくれるとありがたい。」

暫し沈黙が落ちる。一度静かに眼を閉じた冥土返しは、その目を開く。その目には戸惑いの色はなく何かを決断した輝きだけがあった。

「…君が何者かは分からないけど、僕のことは良く調べているとお

もっていたんだけどね？」

静かに開かれた口から放たれた言葉は、こちらが求めていたものではない。その声色に和樹は薄ら寒いものを感じた。

自身が考えたこの手は稚拙ではある。他者から見れば穴だらけであろう。だがそれでも自身にとって圧倒的に優位な状況。断れば死であるはずだ。

それでもどこか嫌な予感がする。

この世界では特殊な生まれであり、前世はごくごく普通の日本人。平和ボケしているといってもいいその感覚が抜け切れていない彼はこの年になるまででもさまざまな闇に触れていながらもまだ理解が足りていなかった。

「……どういう意味だ？」

「そんな学園都市の闇でも公開されていない情報を知っているんだ。――――――なら、これも知っているだろう？」

冥土返しは彼のそんな葛藤など露知らず、ただ一言万感の思いを告げるように続けた。

「僕は患者を裏切らない。」

その意志の力を和樹は冥土返しから読み取った。

そう、これこそが彼が想定していなかったこと。彼は忘れていた。このキャラはこうなのだと。一見飄々としているように見えながら

も患者のこととなれば決して引くことがないということを。

思わず舌打ちをする。

「ここでお前を殺しても俺は構わないんだぞ。」

別にお前を殺した後でお前の体や、この部屋、お前と関わりのある場所を当たればいいんだぞ。」

「それが君にできるかな？君が思っているよりそれは重いよ。」

冥土返しは見抜いていた。和樹が人を殺めたことがないことを、またそれだけの覚悟がないことを。この短時間で和樹の人となりを大体掴んでみせた。

殺すべきだ。

理性が続ける。もしこいつをこのまま生かし続ければ自身の居場所がばれる可能性がある。こいつを殺した後で、部屋なり何なり探してみればいい。それで見つからないなら一端ここを引き体制を整える。だから殺せ。

こいつに向けている銃はおもちゃなどではなく、ここでこの引き金を引けば、あっさりとこの男は死ぬだろう。そのはずである。

だが彼は結局その引き金を引くことができなかった。

悔しげに唇を噛む。自分は弱いと、悔しげに。

「そいつが今後とんでもないことを仕出かしたとしてもか？」

「ああ。それでもだ。僕の患者である限りね。」

彼は一ミクロとして意志を曲げない。自身とは大違い。

「お前は……！！」

思わず口から出そうになった言葉をつぐむ。無駄だと悟ったのだ。この数分足らずにも関わらず、彼は無駄だと悟ったのだ。

「医者としてのあなたを尊敬するが、人としては全く尊敬できないね。」

「何と言われても僕は退くつもりはないよ。これが僕の生きる道だからね。」

代わりに皮肉気に言ったその言葉もまるで堪えた様子を見せない彼に思わず舌打ちする。完敗である。自分は心を読む能力を持たないし、ここで彼に場所を吐かせる手段も全く思いつかない。全く持ってこちらの完敗だった。

それに研究所に何年もいたとはいえ、彼はまだまともな思考回路を持っていた。出来るなら手荒な方法は使いたくない。もっともそれで彼が吐くとは思えなかったが。

認識が甘かったのだ。転生する前は高校生。甘やかされた環境で育ちまだまだ世間を知らなかった彼は、本の中の登場人物を全然認識できておらず、またこのような意思を持つ人物がいるということを知らなかったのだ。

「こちらのことは報告しないでくれるとありがたいんだが…。」

「別に最初からする気もないよ。それで君はこれからどうするんだい。」

諦めたように頭を垂れる恐らくは頼みの綱は潰えてしまった彼に、自分がそうしてたとはいえ…いや、だからこそ彼は和也に問いかけた。それに答えてやる義理はないのだが、先程の意思に多少ながら経緯を表すことにした。それに原作知識などと言うものではなく、彼の人なりがいっても問題ないと思わされた。

「さて、ね。もうこうなったからには手段は選べないし、俺は――――。」

そこで和也の声は途切れた。ここの病院に設置されていた電話が鳴り出したからだ。

「出ても？」

「ああ。かまわない。」

向けていた銃を下ろす。これを向ける意味はもうない。それを確認した彼は電話を取った。

「もしもし――――」

冥土返しが電話に出たのを見た和也は先ほど言いかけたことについて和也は考える。もっともアレイスターに優位にことを運ぶことが出来ると思われた、自分の穴だらけの記憶にある原作知識によって得た取引材料は今この瞬間に潰えた。

こうなってはあまり取りたくはなかったが、直接窓のないビルに侵入し何とかしてそこで有効な手札を手に入れこちらの優位に運ぶしかない。侵入については問題ない。だが入ったとしてもこちらに優位になるようなものが見つかる可能性は低いし、気付かれてしまえばその時点でおしまい。かなり分の悪い賭けである。

それでもやるしかないと決意を固めた時、先ほどまで電話で話していた冥土返しがこちらに電話の受話器を傾けていることに気付く。

「…君と話しがあるそうだ。」

「俺に？」

冥土返しのその言葉に和也は驚いた顔を作る。ここ学園都市に来て電話という行為を行うほどに親しい間柄のものはいない。となれば決まっている。恐らくはこちらを追っている研究者たちまたは学園都市の暗部かである。

ここに直接掛けてきた以上はこちらの居場所がばれたということ。

となると、すぐにでも廃ビルに戻り、体制を整えたいところだが、わざわざ相手がかけてくるということは何かしらの意味があるということである。

「誰だ？」

警戒しながら冥土返しから電話を受け取り耳に当てる。念のため頭には演算の準備をし、何時でもここから離れられるように準備する。

そのように警戒しながら電話を受け取った和也は、

『――ふむ。特定人物以外との会話は久しぶりだ。私が誰か分かるかね■■■■？』

その妙なクリアな電話越しから聞こえてくるその声に思わず冷水を賭けられたように固まった。頭の演算式なんて綺麗さっぱりと消える。

電話から聞こえてくる声は、男にも女にも聞こえ、大人にも子供にも聞こえ、聖人にも囚人にも聞こえる不可思議な声。

医者の方に思わず顔を向ける。それに彼は静かに首を振った。どうやらこちらの事に関して何か言ったわけではないようだ。

「アレイスター・クローリー……！」

そうしてようやく口から出た名前は主は彼が追い、恐れていた学園都市の長であった。

『君は私と話したいようだったのでね。私からさせてもらったよ。』

「どういうつもりだ……。」

「君と話してみたかった。それでは、不満かね。」

渇いた喉を少しでも潤そうとつばを飲み込む。その音がやけに耳に残った。

「…減らず口を。で、実際に話してみてのご感想は？ご期待にはそえそうですか？」

『実に興味深いよ。』

何も感じさせないその言葉に思わず恐怖で背筋が凍る。本当にこのような声を発するものが人間なのかと。

「…それで？お前はここで計画のイレギュラーである俺を殺すのか？」

「私もそう考えていた。最初は。」

今、殺されるのはまずい。と一人の少女の顔を思い浮かべ必死にここからの打開策を考えていた和也の強調するように付け足した最初にと言う言葉にそこから導き出されることを考える。

殺さないということは、研究所に再度送るということなのだろうか？

「…最初は？」

「特にこちらに関わったことがないはずのお前が限られたものしか知らないはずの私と彼のことについて知っていることやこちらに気付かなかったことからかなりアンバランスな知識のようだ。私は学者肌でね。君に興味がある。」

そう話す彼は、彼にしては珍しく薄く笑みを感じさせる声であった。

おそらく考えても分からないこちらの偏りながらも重要な知識を持つことに対し興味を抱いているのだろう。彼は転生の学者肌だ。

そして彼は楽しげにつづける。

「私の下に着け。」

「…っは！誰がお前の下なんかに――――」

「お前が廃ビルにかくまっている少女の安全も確保しよう。」

精一杯の虚勢を張るようにその提案を吐き捨てようとした言葉は、遮るように言われたそれに和也は文字通り息が止まった。完全にこちらの状態を見透かされている。

この時、和也は心のどこかでもう駄目だと感じた。

全てにおいて先手を取られているこの状況。どこからどうやってこちらを見ているかも分からない。完全にお手上げ。和也に万に一つも勝ち目はなかった。

「答えを聞こう。」

その部屋に窓はない。ドアもなく階段もましてやエレベーターもない。

入り口といった概念が一切存在しないそこ。通称窓のないビルと言われるそこに巨大なビーカーがある。

その中には一人の人間が上下逆さにして入っていた。その人間は男にも女にも見え、大人にも子供にも見え、聖人にも囚人にも見えた。

そのものは静かに目の前にある数字の情報を見る。

「あれを回収するつもりが、存外面白いものを見つけた。」

彼は笑う。滅多に出さない楽しそうな笑みで。

彼の頭の中で思い出すのは先程の少年。こちらのプランに今のところは大きな影響はないが、今後の展開次第ではどうなるのかわからない不確定な存在。

「ふむ。あの者がプランへの足がかりの一つになるか。それともまたこちらのプランの中枢へと食い込むことになるのか。」

彼は笑う。いつものように何も感じさせない笑みで。

とある第一話

最近暑さを感じるようになってきたこの頃。すっかり日も暮れ、表街道には人影がすくなっている時間。

第七学区にある長い年月放置され続け錆びた柱がむき出しのままになっており、周囲の人々から外観を損ねるとして、近々取り壊す予定になっているビルがあった。人も寄り付かず、そこを拠点としていたスキルアウトたちも近々取り壊されるということ撤収が終わっており、そこには誰も居ないはずであった。

少なくとも先程までは。

今この廃ビルの中、幾人かの男たちが人目から逃れるようにそこにいた。

「・・・ふぅ。まあとりあえずは無事に追手は撒けたようだな。」

人影の一人が、傍にあった昔は座り心地がよかっただろうソファーにどかりと座り込みながら言う。

その男は髪を金髪に染め大量のピアスを耳にぶら下げ、顔に蝶を模した入れ墨をいれている。

どうやらこの男がこのグループのリーダーのようであり、彼の指示を待つように周りを他の者が立っている。

そんな囲んでいるうちの金髪のリーダーと同じくらいガラの悪い顔をした男が口を震わせながら顔を青白くさせながら口を開く。

「な、なにが無事だ！？あ、あんな大勢いた仲間たちのなかで俺たちしか生き残れなかったんだぞ？！これからどうすんだよ！？」

「あン？俺のせいって言いたいわけ？」

「そ、そうさ！あんたがあんなことを提案しなきゃ、こんなことにならなかったんだ！どうすんだよ！？」

周りもそいつを肯定するような雰囲気が漂い始める。

だがそれにリーダーである金髪の男は何も言うことはなく、黙って立ち上がり声を上げていた男に近づく。

そしてその手を男に伸ばし、何をするでもなくその頭に手を乗せた。

「確かに今回のことは俺の責任だ。あちらのことを少々見くびっていたようだ。だが・・・」

頭に手を乗せられビクりとしていた男は予想していた反応に反したその言葉に鬼の首を取ったかのようにそのまま言い繕うとする。

「そ、そうだ！全部、あ、あんたのせ」

だがその言葉を最後まで発することが出来なかった。一瞬バチリと金髪の男に置かれた手が光った後、あっさりと男は体から力を失い地面に倒れたからだ。

「アハァ！」

金髪の男はそれに狂ったような笑い声を上げながら、足を大きく上げ倒れた男の頭に向け何の躊躇することなくおもいっきり踏みつけた。

「・・・だが、いつからオメェは俺に意見することができるようになったんだ？！」

そのまま何度も止めることもなく頭を踏み続ける。鼻は折れ、蹴られた頭からは血が流れる。

「聞いてますか、オィ？！・・・って聞こえるわけねぇわなぁ？ったく、お前らクズのレベル０が今までこうして生きてられたのが誰のおかげかも忘れちまったわけか？！ここは逆に感謝にむせび泣いて俺に膝を折るところだろうがよぉ！！」

狂ったように踏みつけるが倒れた男が起きるどころか意識を取り戻す様子はない。当然である。男は倒れた時にはすでに死んでいたのだから。

そうして一通り満足したのか足を漸く頭からどける。踏まれたことで頭が凹み血が床を汚す。コンクリートに接触していた顔はもはや想像もしたくない惨状になっているだろう。

もはや周りの男たちに先程の空気など微塵も残っていない。ヘタなことをすれば次は自分の番であることを理解したからだ。

周りが恐怖の視線を向けてくるのを満足そうな眺めたリーダーである男はこの後どうするかについて言う。

「とりあえず俺たちの顔はもう連中には割れているだろう。ってことはだ。このまま呑気にこの学園都市にいりゃあ、確実に俺たちは連中に捕まっちまう。」

「じゃ、じゃあ、どうするん…ですか……。」

再び一人騒ごうとするが、睨まれることで続く言葉が尻すぼみになっていく。

「焦るんじゃねぇよグズ！少しはその足りねぇ頭で考えろ。今回俺たちが危険でありながらもこの作戦を実行した理由を思い出せ！」

「それはリーダーが手に入れた情報から研究データを盗み出して外部の組織に売りd」

「そうだ。その売るのに付け加えて俺たちの身柄を保障させりゃぁいい。」

「…つまりこの学園都市の外に出るということですか……？」

「そういうことだ。」

「で、でも、この学園都市の外に出るって…。」

周りが不安げに騒ぎ出す。

「こうなっちまったからにはしかたねぇだろうがぁ。」

そんな反応をリーダーであるこの男は冷めた目で見ていた。

彼は他の仲間には言っていなかったが、実は当初からこの計画を

考え、実行するつもりでいた。
もとより学園都市の闇に見つからずこの作戦が成功するとは考えていなかったし、何よりもこれから物語の中心となるこの学園都市から関わりたくはなかった。

仲間にこのことを言わなかったのは途中で学園都市の外ということで不安がられ抜けられる可能性があったためだ。彼らは学園都市のことを嫌ってはいたがここから逃げ出すことには先の見えない不安のようなものから恐がっている。

まあそれもこのような土壇場のような状況なら逃げようにも逃げられないため従うしかない。

仲間は思った思った以上に早かった学園都市の対応で数がかなり人数が減っていたが、自分一人程度なら学園都市の外に出ることも可能だと男は考える。

彼に仲間意識などはない。自分以外の、特にレベル０などは自分にとっては使い捨ての道具のようなものでしかないのだ。

「質問があんなら今のうちに言っとけ。」

「あちらが手に入れた研究データじゃ受け入れられないとか言い出したら…？」

「それだけじゃ不服って言うならそこら辺から能力者攫って手土産にすりゃあいいだろう。っま、必要ねぇとは思うがな。この中に入っているレベル５のＤＮＡマップ、その他もろもろの技術がありゃぁそんな心配は無問題だ。これだけでまだ十分おつりが出る。」

頬を吊り上げ言われたその言葉に周囲に安堵の空気が流れる。

確かに最初に外部と取り引きした内容にさらに条件を付けたしたこと何か言われるだろうが、何せ奪った研究データには学園都市でも七人しかいないレベル５のＤＮＡマップがはいっているのだ。下手な能力者を連れ出すよりもよっぽど価値があるだろう。

ここまでは多少の誤差は合ったものの彼の計画は上手くいっていた。

「さぁて。とりあえずお前らの足りねぇ脳味噌でも理解できたかぁ？なら、とっとと動き」

「まあ、大体の学園都市から逃げようって奴は外部との協力がポピュラーなんだよなぁ。」

と、今まで誰も居なかったはずの空間から声がする。その場にいる全員が一斉にそこに視線を向けた。

崩れた恐らくはこの一室の家具の一つであっただろうそこに学生服を着た青年が一人、気だるげに座っている。顔は整ってはいるものの特に何か変わったところがあるわけでもない。髪や服装だって一般の範疇である。異常があるとすればそこにいることこそが異常。

誰も居なかったはずであるそこに最初からいたかのように彼は居た。

彼にミスがあるとしたら自分が考えたものよりもさらに学園都市の闇は深かったということだろう。

「だが学園都市がそんな誰でも考えられそうなことに対処してないと思ったか？ただのスキルアウトごときがコンタクトが取れる組織なんて限られてるからな。」

「お前ら頼みの綱の外部協力者は生憎だがこっちで先に潰させて貰った。・・・当てが外れて残念だったな？」

周りの空気が硬くなる。先程までソファーに座っていた男はすでにその場から立ち上がり臨戦体制になっている。それでもその青年は動じない。

「理解したなら、聞かせてもらいたいことがあるんだけど。なるべく早く教えてほしい。……進んで残業する趣味はないからな。」

「…殺せ」

誰もいないはずの廃ビルの一角に音が響いた。

ドゴン！！

絶え間なくビルから響きわたる。

先にビルの中にいた四人は学園都市からの追っ手だという男を距離を取り四方を固める。その各々の手には武器を構え、リーダーであるとおもわれる男は銃まで所有している。対する青年は一見特に何かを持っているようには見えない。一見明らかに男たちが優位な状況。

だが、そんな状況にもかかわらず

ドン！！っと先程から響いていた音の一つ、リーダーである男の能力による雷が放たれる。寸分外れることなく青年の胸に当たるかと思われたそれは、次の瞬間、青年が消えることでかわされる。雷が彼のいた場所を通り過ぎた時にはすでに青年はは囲みの外につまらなそうに立ち、背後で電気は壁に当たり弾けた。

「ッチ！テレポートか。全くもって厄介な能力だ。」

手で部下に再度囲むように指示しながら、このグループのリーダーである男が苦々しげに呟く。一見有利であろうはずの男たちは明らかに疲労の色を濃くしている、にもかかわらず対する青年は息を乱すどころか汗一つかいていない。

先程から彼はこちらからの攻撃を一瞬消え、別のところに現れることでかわしてくる。自身の知識から空間転移能力であることと推測する。同時にこの状況が非常に拙いということも理解した。空間移動能力者に捕捉されれば逃げ切ることはかなり難しいと言わざる得ない。

傷こそ負ってはいないものの彼らの服は汗で張り付いて汚れており息は絶え絶えとしているのに対し、服こそ多少埃が付いているが、あちらは息一つ乱れていない。考えるまでもなくこのままこの状態が続けば遅かれ早かれいつか捕まる。

「……はあ。いい加減教えてくれないか？どうやってあの実験のことを知ったか。こっちとしてはあんたらがあまり痛い思いしないように気を使ってやってるんだから。」

だが、幸か不幸か相手の青年は自身の実力に自信、過信している

のか、攻撃してくる様子もなくさらには仲間が周囲にいる気配は感じない。ここで口封じをするのは難しいかもしれないが、自分だけが逃げるだけなら何とかなるかも知れない。ポケットに入っているものを片手で弄びながら考える。

あらかじめ作戦中の連絡手段のためであったインカムは今も付けっぱなしである。学園都市製であるこれは持ち主に違和感を感じさせることもなく、また注意深く観察しなければ相手はつけていることに気付けない。

彼はそっと青年の死角に立ち、電源を入れ気付かれないように小声で指示を出す。

「返事は返すなよ、グズども。ここで捕まりたくなかったら黙って俺に従え。」

返事はしなかったものの、リーダーである彼に仲間たちの視線がチラリといく。それに思いっきり罵声を浴びせたくなる気付かれるわけにはいかずひとまずはそれを押さえ込んだ。

「……よし。今から指示を出す。その間オメェらはあの野郎に気取られねえように野次飛ばすなり、適当に相手して注意を引いとけ。」

それから数分後、先程から変わらない動きにいい加減イライラし始め、そろそろ動こうかと考えた時リーダーは部下たちに作戦を伝え終わった。

「うおおぉぉらぁぁ！！」

まずこのグループの中で一番大柄で筋肉質な男が手に持った鉄パイプを片手に一本ずつ持ち大声を発しながら青年に殴りかかる。

突然今まで大人しかったそいつが生きない理動き出したことに僅かに青年の注意がそちらに集中する。が、大降りで振るわれるそれは、わざわざテレポートする必要性も感じられず、最小限の動きで回避すだけする。だが、大柄の男はそれに気にした様子もなく、大降りであったため体が泳いでいたものの、そのまま体勢をすばやく立て直しそのまま果敢に、というよりも我武者羅に、狂ったように攻める。

それに僅か目を見開き、相手の動きにさらに注意が行く。我武者羅に振るられるそれは、多少注意をそちらに向けなければ少し危ない。

その様子を見て、大柄の男に対し、多少青年の注意を引いていると判断。彼は自身の能力より先程からしている攻撃と同じように青年に向かいはなっていた電撃の槍を放つ。単調に真っ直ぐ向かってくると思われたそれは次の瞬間枝分かれし、いくつもの小さな電撃の槍となる。

彼は自身の能力の威力がレベル5どころか、レベル4にも届かないことを理解していた。ゆえに彼はこのような技術に力を入れていたのだ。多少は時間が要るが器用なものである。威力は落ちるものの、一時的に動きを止めることは可能だろう。

通常の人間ならこの面の攻撃によけるのはかなり困難。だが、ただ数が増えるだけでは転移能力者には意味がない。

わずかに驚愕は示したもののこの程度で演算が崩れるわけもなし、

あっさりとその範囲から外に出た。

「おらあああああぁぁぁ」

だが、そこに先程の電撃範囲から逃れていた大柄の男がまるで待ち伏せしていたのかのように転移した青年に向かい駆け鉄パイプを振りおろした。

「余裕のつもりか、はたまたそれが限界なのか。どちらにしてもお前は最小限の距離でしかさっきからやらねえ。そんなワンパターンばっかりじゃ、俺みたいな奴に逆算されるぜぇ！！」

その様子を見てこのグループのリーダーである彼はにやりと笑う。

「…ご忠告どうも。でも不意打ちで声を出したら駄目だろぉ。」

むすっとした顔をしながら振り下ろされた攻撃をかわす。

「だからテメェは俺をなめすぎだ。遊んでないでとっとと俺たちをぶっ殺しゃあよかったのによぉ。」

それに何時の間にいたのか小柄の男が大柄の男の影から不意を付くように現れた。

だが青年はそれを見て特段驚きは示さない。この小柄の男が先程の電撃による弾幕により、視界を閉ざされていた間に後ろに隠れたのは”最初から”わかっていた。

だから彼が驚いたのはそいつが持っていた物。

「！！？しま」

次の瞬間、部下の男は発光、爆音をもたらした。

スタングレネード。学園都市製のそれは本来なら暴走能力者に使用されるものである。

完全に不意打ち。学園都市からの追っ手である彼はこちらの思惑通りその体を屈眼を硬く閉じ、両手で耳を塞ぎ辛そうにしている。

攻めさせた二人には相手に気付かれないように眼などを閉じさせなかったため同じように苦しそうにしているが、リーダーと部下であるもう一人の細身の男は、あらかじめ準備が出来ていたため問題はない。

思った以上に上手くいったことに思わず口元を吊り上げるが油断はしない。時間を置いて回復されれば元もこうもない。

（ここでこいつは再起不能にさせる。）

リーダーの横で同じように被害を免れた部下が下種びた笑いを顔に貼り付けながら近づいてくる。今までの鬱憤もこめて思いっきりいたぶるつもりだろう。

それにイライラしながら早く殺せと言おうとした瞬間、

いつの間にか男にか細身の男は胸の辺りから鉄パイプが生やしていた。見れば先ほどまで大柄な男が持ち、グレネードの被害に耳を塞ぐために手放していたパイプがない。おそらく今、部下の一人に

生えているのがそうなのだろう。

「――――――あ？あ、あ、ああ、うあああああああぁぁ！？」

そのことを知覚するが早いか刺さった鉄パイプが引き出す痛みに男は悲鳴を上げ、床に倒れふす。
あたりに血が流れる。

「あ、あー、ああ？大分マシになったか？…ったく、やられた。まさかそんなもんまで持っていたとは。報告で上がってなかったから完全に油断してた。最初からいることに気付いてなかったら流石に危なかった。」

いやー。耳は塞げたはずなのにまだキンキンする。

なんてふざけたことをいいながら彼は、屈めていたその体を起こす。まだグレネードの効果は続いているのか両目は閉じられているが、その顔は悲鳴を上げた男の方を向き、表情を苛ただしげにしている。

「ムーブポイント！？」

今まで自身しか跳んでなかったためレベル４の自身と手に触れたものしか跳ばせないと考えていた。いや、そもそも自身の知識が正しければムーブポイントはレベル５並みの演算能力が必要とされていたはずである。そして彼の穴だらけの原作知識で、それが出来るのは結標と言うキャラだけのはずだ。仮にこいつがその結標にしてもあるトラウマにより自身を跳ばすことは出来なかったはずである。何よりも目の前の者はとても女であるようには思えない。

ならばこいつは一体なんだ？

っと、先程まで青年と同じようにうずくまっていた男が青年より回復が早かったようでその目はしっかりと開けながら、残っていた鉄パイプを両手でしっかり握り思いっきり振り上げている。

「ったく。ほんとイラッとする。」

それが振り下ろされたのと、青年が目を開けることもなく最初からわかっていたかのようにゆっくりと顔を後ろに向けたのはほぼ同時だった。

確実に当たると思われたそれは、しかし青年から当たることなく少し離れたところで弾かれた。あたかもそこに見えない壁があるように。

思いっきり振り下ろしたことと、突然の予期しない壁による衝撃で手から鉄パイプが滑り落ちる。

カランと音がして転がったそれは青年の足元に当たり止まる。それを青年が拾い上げると、それに気付いた大柄な男はビクリと反応し慌てて後ろに後ずさる。

「落し物はしっかりと返さないとな。」

青年が手にした鉄パイプが消える。そして次の瞬間には、大柄の男の手にそれは帰ってきた。
ただし手の平を貫通させて。

「ギ、ギャアアァァ！？イデェ、イデェよォォ！！――――い、いやだあああ！！おれ、また、死にたくない！じにたくねええよお！！」

「今までさんざんやってきて、この期に及んで命乞いか。胸に手を当てて考えてみろ。さんざん人を踏みにじってきたお前を助ける意味が分からん。」

だが、それでその男の口から悲鳴が漏れることがなくなるわけもなく、必死に命乞いの言葉を叫ぶ。

「……ッチ。死にたくなかったらそこで何もせずに惨めに蹲ってろ。」

（こいつ？！後ろに目でもあんのか？いや、アイツのさっきの動きはむしろ俺たちの位置を正確に把握していた？どういうことだ。俺の記憶が正しければ転移能力者に相手の位置を知るような能力はなかったはずだぞ？！）

一連の動きに先程以上の驚愕をもつ。しかし相手は考える時間を与えてはくれない。

「まったく、まだ耳がキーンと鳴っている。」

耳を気にしながら、ふっと視線を横にずらせば、そこには先程グレネードを抱えていた男の方を見る。

「い、いやだあぁぁ！！」

そいつは、逃げようと走っていた。だが、一番にグレネードの被

害を受けたためか平衡感覚がおかし苦なっているようでその歩みは酷くふらついている。

だが、それでも顔を恐怖により出た涙やらでグチャグチャにしながら、先程から起こっている目の前の事象から懸命に走っている。

が。

「ひぃぁ？！な、なんだよこれえぇ！！！」

それを青年は、軽く右腕をそいつに向けたかと思えば、逃げ出していたはずの男はその体は気が付くとビルの柱の一つにどういうわけかめり込んでいた。

突然の出来事に自身が飛ばされたことにも気付かず、必死にもがくが出られるわけもなく悲鳴を上げる。

そんな男の様子を無視し、ゆっくりと最後の男に向かって歩む。

その光景を見、彼は理解した。自分がここで終わると言うことを。

次々と起こる想定外の現象に彼は諦めた。もしここで仮にこの男を倒したとしても、捨て駒にしようとしていた仲間はもういない。ここから逃げることはかなわないだろう。

だが、せめてもの反抗か。彼は自身が一瞬で精製できる全力の一撃を相手に放った。

文字通り雷の速さで放たれたはずのそれはしかし当然と言うべき

か、あっさりとその場から消えられることでかわされ、その後ろにいた壁に埋まっていた仲間(捨て駒)に当たり、その口を永遠に止めることしかできなかった。

ッガツ

鈍い音ともに彼の頭に鉄の塊が当てられる。

消えた男はいつの間にやら彼の後ろに立ち、腰から取り出した拳銃を男の額に当てていた。

「…はあ。大分時間が取られたが、お前が、ここの頭でいんだよなあ？」

「・・・ッハ、ハハ、ハッハハ！」

頭に当てられたその冷たい鉄の感触に狂ったような笑いが漏れる。

「ク、ククク、クフ……おい。質問に答えてやるからよお、お前のことも話せ。どうせ俺はここで死ぬんだ。それぐらい話してくれてもいいだろう？」

「何故？」

「好奇心って奴？俺の知識にない奴だから気になったのさ。」

「……ッチ。同郷かよ…。」

そんなとこだと思っていたよ。

苛ただしげに言った言葉に今度は相手の方が今度は数秒眉を顰める。が数秒後、その意味することに気付いた男はまた狂ったように笑い出す。

「あン？……クヒ、ヒヒ、ハハハ！なるほどそういうこった。コイツはお笑いだ。俺と同じ！しかもそいつが俺の最後を飾るか。全く持って…よくできているじゃないか！！」

「もう分かったからいいよ。コレだけ苦労したのにこれじゃあ報告のしようがない。……そろそろ楽にしてやる。」

「ああ？！そうだなあ！俺は先に退場だ！！アヒャヒャ！お前もこのままいりゃあ、いづれ拝むことになるぜ？！このクソったれなせ！！？」

ドン

銃声が響く。それと同時、このグループのリーダーだった男は地面に倒れた。狂ったような笑みを崩さず。

「……そんなことお前に言われなくてもとっくに知ってる。」

いまいましげに拳銃をホルスターに納めながら、もう聞こえないだろうそれに目を逸らした。

どこかに連絡連絡するためか、自身のポッケトを探り携帯を取り出そうとすると同時、狙い定めたかのように電話がかかってきた。

それに眉を顰めながら電話に出る。

「お仕事は終わりましたか？」

電話口からねっとりとした女の声が出てくる。

「狙ったようなタイミングで電話しときながらよく言う。」

「別に今回は狙ったわけではありませんよ。…たまたまです。私は勘がいいんですよ。」

その様子なら終わったようですね。などとおかしそうに笑いながら電話の主は言う。それになんともいえない表情をしながら単刀直入に用件を切り出す。

「たぶんリーダーだと思う奴殺しちゃったんだけど。」

「ああ、問題ありませんよ。そんな時間が経ってなければ、後で適当に死体から記憶を読める読心能力（サイコメトリー）者を派遣しますから。残りの情報ぐらいなら何とかなるでしょう。それよりも、おそらくリーダーが所有していると思われるディスクを回収しといてください――ホント馬鹿ですよねえ。今までと同じように大人しく“置き去り”の女達をこちらに関わらないように漁ってれば良かったものを。それをこちらに干渉しようだなんて。どっかに売り飛ばすつもりだったのでしょうかねぇ。……それともその情報から作って、置き去りのようにヤってみたかったのでしょうか。まあ、これはもちろん冗談ですが。」

何が面白いのか電話口の相手はクスクスと笑いを漏らす。それに顔をゆがめながら黙って、死体からディスクを探り出す。

「……あったぞ。」

「ああ。やっぱりちゃんと持ってましたか。後で回収に来る奴らに渡しといてください。こいつらを逃がしたとはいえ、それぐらいならあいつらにもできるでしょうから。まったくこんな奴らに出し抜かれるとは、役に立たない部下を持つ私は大変なんですよ。そもそも……」

「もう切るぞ。」

愚痴のように零す言葉にいい加減付き合いきれないと言葉を乱暴にしながら、電話を切ろうとする。
そもそもこの女はほっとくとこちらを考えず一方的に喋り続ける。

「釣れませんねえ。ああ、そうだ。一つ言っておくことがありました。」

「……なんだよ。」

いらただしげにしかし聞かないわけにもいかず、再び携帯に耳を当て乱暴に問う。
その様子を気にした様子もなく、とても楽しげな様子で電話の相手は言う。

「あなたが、保護した少女たちですがね。完全に壊れてて使えなそうでしたから、こちらで勝手に処分しておきましたよ。」

「ッ！！」

「ふふ。では、ごきげんよう。雨宮和樹君。」

電話が切れる。それと同時足が崩れ床にひざをつく。
切れたはずの電話から相手の嘲笑いが聞こえてくるような気がし、手にしていた携帯を投げ捨てる。
仕事用に渡された携帯は嫌に頑丈であったようでこれぐらいの衝撃は問題ないようであった。
それが余計に腹が立った。

「っ、ちっくしょうが…！」

彼が持つディスク。そのディスクのケースには［超電磁砲量産計画『シスターズ』について］と書かれていた。

とある第二話

学園都市、第七学区のとあるマンション。一人、雨宮和樹は惰眠をむさぼっていた。

彼の今住んでいるマンションは、所望裕福層の使う部屋であり、部屋は２ＬＤＫ、その
とかなり広く、１人で使うにしては広い。彼は、二部屋のうち一つを使用し“彼自身”は、もう一つの部屋を使ってはいなかった。彼の部屋の中を見ると、一見綺麗に掃除されいるようである。が、よく見ると部屋の隅などに埃が落ちていたりなど、所々に荒さがある。

ジリリリリ！！

なんの捻りもない音の朝の目覚ましの音。それを鬱陶しそうにベットで寝ていた和也は手を伸ばす。
夜遅くに寝たのでまだ寝たりなかったようで、顔を枕に埋めたまま手探りで不快な音を鳴らしつける目覚ましを探る。なかなか目覚ましが探れず、少しイライラしてきた頃漸く、目的の物を見つけそれを止める。

（～～～～寝たりねえ。）

非常に布団から出たくない。今日はここで一日過ごすのだ。と、暫く布団の中を転がりまわる。

（あ～、畜生。今日学校あったんだ。めんどくせー）

だが、彼は意外にもに真面目君であった。そのことが学校をサボ

る事を阻害する。もそもそとゆっくりだが確実に起き上がる。
欠伸をかみ殺しながらカーテンを開ける。同時、窓からさんさんと輝く太陽の光が差し込んできた。それに眩しそうに目を細めた後、着替えようと部屋を振り向くとテレビが目に入った。

「ああ、そうだ。」

和哉は何を思い出し机の上に置いてあったリモコンでテレビを点け、チャンネルを弄り始める。
暫く弄っていたところ、目的のチャンネル学園都市専門放送チャンネルというところで止める。
そこには、大学生位の女性が所々つっかえながら、手元の用紙を読みあげているところで映っていた。

『――――ここ最近、電子機器の、えっと、故障が増えているようです。ある一定の周囲でこのようなことが起こっていることから何らかの人為的？であってるよね？…えー、人為的な疑いがあります。まだ、詳しいことは分かってませんが、そ、その手口から発電能力者が関与している疑いが、あるそうです。……実はつい先日、私の携帯もお釈迦に――――』

いくら生徒の自主性を促すことにしてもテレビ放送を学生に任せるってどうよ？
などと偉そうに和樹は批評してみる。このチャンネル自体は、学園都市のみで放送される特別なものであり、外部には一切放送されない。その為もっぱらニュースやドラマなどを含めその内容は学園都市を舞台にしたものばかりである。

制作も外と違い、大人の人間が作る番組もやるのだが、基本的に

生徒の自主性を促すためや放送業界に携わる生徒の練習などの理由で割りと頻繁に学生主体で番組を作っている。だが、たかが学生が作ったものと侮ることなかれ。ここは、学園都市である。番組によっては最新の技術によって作られたりするので、一部の番組はそこそこ人気があったりする。

今点けているこの番組は学生たちがこの学園都市であったことをニュースにして放送して放送しており、アナウンサーがかわいいということで一部の人間からは人気があったりする。噛みながらも必死になって頑張るとこが萌えるらしい。

ちなみに彼はそのようなカルト的趣味は、たぶん持ってない。そんな彼がこの番組をつけているのは理由がある。

（“あいつ”が見てみて、っつうからつけたけど、……学園都市についてだけ見るならツリーダイアムの情報を写しているチャンネルで十分だろう。あっちの方が正確だし、情報新しい。それに何よりも噛まないし…。）

つまりはそういうこと。進められたのでとりあえず点けてみただけである。

普通のニュースの方が良いや、などと適当にテレビを聞き流して、そんなどうでもいいことを考えながら、奥のたんすに向かい服を着替えようとし、

「――――あー、そういえばそのまま寝ちまったんだっけ。」

帰ってきてそのまま寝てしまい、服を着替えていなかったのだ。ついでに言えばシャワーも浴びていない。

「うっかりしてたな。昨日はいろいろと忙しかったからなあ。」

たんすから着替えを出し、そのまま気だるげに風呂に向かっていた。

『――――続いてのニュースです。今日の深夜、以前から第7学区にあったビルを今日解体するということです。以前から解体予定はありましたが、具体的な解体日は決まってませんでしたが今日、突然のことで周囲は驚きを示していましたが、不良の溜まり場でもあったこのビルの解体に好意的に迎えられそうです……やった！ほら、今噛まなかったよ！すごくない！！――――』

後にはテレビが主のいない部屋で空しくテレビの音が響いていた。

シャワーを頭から浴びたことにより、眠気が覚めた彼はふと今について考えていた。

雨宮和樹はこの世界に存在する転生者である。ある日事故にあい、気付いたらこの世界、禁書目録の世界に転生してしまっていた。

まあここはある程度割愛させていただくとして、ここが自身が読んでいた本の世界ということで、もちろん彼は原作の知識がある。だが、彼のそれは残念ながらこの世界に誕生した時点で穴だらけであった。さらには日増しに時が立つごとに、彼は自身の原作知識を忘れてきてしまっている。一時はノートなどを取って対策を取ったこともあるが、置き去りになった時、無くしてしまった。

まあ、そんな状態であっても多少は憶えていることはある。その

彼が覚えている原作知識の中でも少し変化していることがあった。例えば和樹の能力はレベル5、第3位となっている。

そう、御坂美琴であったはずの第3位だ。では、美琴はどうなったのか？彼女は今第4位になっている。和哉が入ったことにより原作では7人だったレベル5が8人になっており、3位以下だった者達は一つ繰り下がっている。

（コレで何か影響が出るか……。）

彼にとっては生きるために必死になっていた結果、気が付いたらなっていたのだから指摘されてもどうしようもない。

「今更、こんなことを考えてもしょうがない、か……。」

こんなことはすでに何回も考えていた。

すでにこれ以外にも色々と変化はある。はっきり言ってこの程度の変化ならまだ可愛い方なのだ。

頭を振りながら彼はそれ以上考えるのを止めるのだった。

朝の支度を終え、朝食に取り掛かる。朝から手の込んだ物を作る気力も湧かないので、何時も朝は昨夜の残り物、なかったら冷凍食品で済ます。“同居人”がいたころはそれでも毎朝手を抜かず手作りであったが、流石に食べるのが自分一人となれば作る気にはなれなかった。

（冷凍食品は便利なんだけど栄養が心配なんだよなあ。いや、学園

都市じゃそうでもないんだが。・・・やっぱりそんなことを思うのはこの中途半端に残る前世の記憶からか？・・・まあ誰でも合うように作られているから、何か機械的な味なんだよ。うん。やっぱ家庭の味を）

などと誰に言い訳しているのか内心でそんなことを取り留めもなく思いながら、それでも手慣れたように朝食の準備はすすんでいく。昨日の夜は、外で済ましたため残りはないので、適当な冷凍食品を取り出しレンジに入れ、トーストを一枚トースターに突っ込む。

出来るまでの間、彼は先程見た番組についての感想をとりあえず適当にメールで送る。こういうところはマメなのだ。

そうこうしているうちに朝食の準備が終わり、食べ始める。結構余裕気に行っているが、時間的にそんなに余裕はない。

食べ終わった時には、ここに住んでいる住民では和樹の学校に行くのはもうすでに遅刻確定であった。あくまで普通ならだが。

「さてと」

玄関に置いたバッグを背負い、靴を履き立ち上がる。

そのつかの間、和哉は玄関から消えていた。

景色が一気に跳ぶ。目に見える光景が次の瞬間にはまったく別の光景に変化する。

今彼は高速で学校に向かって近づいている。そのスピードは非常

に速く、このスピードなら遅刻どころかかなり時間が余ることになるだろう速さ。それは本来人間では出ることなどありえない筈の速さである。この速さは彼の能力のテレポートによるものである。だが、その能力精度は他のテレポート能力者の比ではない。距離、そして特に次の能力使用まだのタイムラグが通常の転移能力者と違う。彼は一回のテレポートで３００メートルまでの距離を跳び、更には次の能力を使うまでの時間が非常に早く、学校に向かって遅刻しないように走る生徒たちの目には一瞬でその場から消える和哉の姿を捉えられない程の速さだ。

彼にとって自分だけが跳ぶだけなら３００メートルぐらいの距離ならほぼタイムラグ無しで跳び続ける事が出来、大した手間も負担もない。他の空間移動能力者とは違う圧倒的な能力行使スピード。否、正確に言えば彼の能力は瞬間移動（テレポート）ではない。彼の能力は瞬間移動能力の上位能力と分類されている。

学校の校門前で、テレポートを止める。開始チャイム5分前に到着。あたりは登校している生徒たちが溢れている。

止めた途端、周りの視線が和哉に集まる。その向けられる視線は、羨望、恐怖、畏怖、嫉妬など様々なものであるが、好意的な色は見えない。それに周りに気付かれないように小さく溜息を吐いて、足を自分のクラスに向ける。

彼が通っている学校は上条たちが通っている学校と同じ、ではない。

彼の通っている学校は、長点上機学園ほどではないがそこそこ優秀とされており、上条たちの通っているような高校などよりも高い

レベルの能力者が多く通学している。そんな優秀に分類されるだろう彼らが何故、和哉に対して嫌悪しているのか。

実はこの学園。実は長点上機学園の一芸に突出した学生を採用するというもので能力枠で受けた者や、主に有名校から能力の面で“落ちた”学生が多数通っているのである。それらの高校を受験したということはそれだけ自身の能力に自信があったということ。つまり彼らは自身の能力に対しプライドが高いのと同時にコンプレックスの対象でもあるのだ。

そんな学園に和樹は学園都市に8人しかいないレベル5である。彼らからしたら自分よりも能力が高い和哉が焦がれ、そしてひどく疎ましい存在なのだ。

彼がレベル5ということもあり表立って行動するものは少ないが、それでも好意的に接するものはいない。もちろん彼等のような者以外も通っているもののそういった者たちの目が恐く接触などしてこない。

まあ、それ以外にも、本人がその状況を改善しようとしていないのというの多分にふくまれているのだが、それはともかくとして

「やっぱ。息苦しいなここは…。」

彼は、この学園に友達がいなかった。

場面を変え、少し時間を巻き戻す。

常盤台中学、女子寮。

学園都市の中でも五本の指に入る言われる名門であり、同時に世界有数のお嬢様学校だ。

そんなお嬢様学校の寮に一人の少女が居た。彼女は日本人であるはずだが、腰近くまで伸ばしているその髪は真っ白である。彼女の名前は漣由愛といい、その顔は童顔で小動物を思わせ、綺麗というよりもかわいいという言葉が似合う少女であった。

『――――ある一定の周囲でこのようなことが起こっていることから何らかの人為的？であってるよね？…えー、人為的な疑いがあります。まだ、詳しいことは分かってませんが、そ、その手口から発電能力者が関与している疑いが、あるそうです。……実はつい先日、私の携帯もお釈迦になりました。この時間をお借りしまして黙祷をお祈り……っえ！？無理ってそんな――――』

そんな彼女は寝巻き姿で食い入るように、しかしその顔は無表情にこっそりと寮監に内緒で持っている小型携帯テレビを寝転がりながらベットで足をばたつかせ見ている。その姿は、間違ってもその姿は世界でも有数のお嬢様学校に通っているようには見えない。

「由愛、あんたまたそんなの見てるの？」

後ろから聞こえる呆れ交じりの声に由愛は振り返る。そこには、寝起き目を擦り、大きなあくびを漏らしながら、声をかける少女がいた。彼女は短く切り揃えた茶髪の髪をしており、服の下からは健康的な小麦色の肌が伺えた。

そんな彼女は今、髪を手でボサボサにしながら少女がベットの上

で胡坐をかいて座っていた。その姿はまた先程の少女以上にとても嬢様には見えない。

「はあ…。なおちゃんはどうしてこれの良さが分からないのかな？人が必死になって頑張って、何かをしようとするのはとても輝かしいことなのだよ。この番組はそんな人間のそのすばらしい姿を教えてくれるの。って、そんなことよりそんな格好してたら、寮監に怒られるよ。」

そう言っている顔は、相変わらず無表情のように見える。だがその目は親しい人なら分かる、きらきらと輝かせていた。

彼女は常に無表情というよりも表情がなかなかせず、外部にも分かるような反応を示すことが少ない。それ故に始めて彼女と接する人は彼女を無感情で寡黙とよく捕らえる。だが実際はその逆。分かりにくいが実際は感情豊かであり、よく喋る。ただ顔に出ないだけで普通の女の子なのだ。

「…ってか、本来ニュースってのは情報を知るためのもので、そういうものを知る物じゃないと思うんだけど……。あと、そんな格好で見ているあんたもあんまり人のこと言えないとおもうぞ。せめて着換えて見なさい。」

「ん。分かったけど、それこそなおちゃんには……」

由愛の苦言を軽く聞き流して着換え始める直美の姿に納得のいかないものを感じ反論をしようとするが、今まで手に握っていた携帯の振動に気付き、話そっちのけに携帯を慌てて開く。

「あんたの携帯、型古いよねえ。いい加減新しいのに変えたら？」

由愛の携帯は外の世界から見たらかなりの最新型の携帯なのだが、この学園都市は外に比べ科学技術が、2、30年先をいっておりそれに比べたら2、3代も遅れている。因みに直美は薄いカード型の携帯を使っている。

「……んー。確かに便利だろうけどいろいろと思い入れがあるから。っえ。」

「どっした？」

突然声を上げる由愛に驚きながら直海が尋ねる。

「和樹君もこのテレビの良さが分からないって…」

「はいはい。」

着換え終えた二人は、自分たちの友が待つ玄関へと向かう。

楽しそうにされど常の無表情で前を歩く由愛の後姿を見て、直海はふと物思いにふけていた。

佐々木直海。彼女は和哉と同じ転生者である。この世界が生前読んでいた本“とある”の世界であることも知っていた。

（そろそろ、とある科学の始まる頃だっけ？あー、魔術の方はどうなんだろう。こんなことになるんだったらしっかり見ておくんだたなあ……）

だが彼女は、原作を読み進めてなかったため和哉に比べさらに原

作に対しての記憶が曖昧だった。彼女は前世でとある科学の超電磁砲のアニメで見てはまった口で、死んだのはその原作にあたるとある魔術の禁書目録を読み進めている最中だったのだ。

ただでさえ少ない知識。それに加えて唯一参考になると思われた”とある科学”も劣化している。正直自身の知識があまり役に立つことはないと思っている。だが、それでも一つ彼女は疑問がある。

「ん？どうしたの？」

「いやいや、なんでもない、なんでもない。相変わらず楽しそうだなあ、って思って。」

表情には出てないけど。なんて失礼？だと思われるその発言は口から出さない。

「うん。たのしいよ。本当にここの暮らしは楽しい。」

相変わらず表情には出ないがその気持ちは何故か直海に伝わる。器用なことだと内心でひそかに思う。

この少女こそが彼女の疑問。

ある出来事をきっかけに友となった漣由愛という少女は、少なくとも彼女が見ていた“とある”の話に由愛という少女は存在していない異質な存在だった。

そのことにより暫くの間、彼女を警戒していた時期もあった。まあ、結局のところ少し変わっているところもあるが普通の女の子という見解で落ち着いている。もともとそれほど読み進めてなかった

のに加え、穴だらけの知識である。見落としているのかもしれない。単に原作では語られなかっただけかもしれないのだ。それとなく前世のことについてそれとなく聞いてみたこともあるが、理解できていないようででっかい？マークを浮かべられた。

今は由愛がいるのは自分が原作にいることによる影響ということで一応は納得したのだ。

（うーん。でもまだ何かモヤモヤしてるんだけどなあ。なんなんだろこれ？）

すれ違う寮の友人に挨拶している由愛を見ながら、彼女は難ともいえないその感覚に一人首を捻っていた。

「……ねえ、由愛———」

「っあ！やっと来たわね、二人とも。待ちくたびれたじゃない。」

「あら。お姉さま。私との語らいの時間は退屈だったというのですの？」

気が付けば、いつの間にやら玄関に来ていた。そこには二人の少女がおり、彼女たちを見つけ手を振っていた。

「あんた、そんなベタベタくっ付いてくるじゃない！！」

「まあ、お姉さま。そんなことはありませんわ。引っ付くというのはこういうことを！！」

「あー！別にやらんでいい！！早く離れなさい！！」

「お・ね・え・さ・まあぁぁ！！！」

「この！黒子お！！」

一人の少女から電撃がはしる。

「いつもどおり元気そうだねえ。」

「……そうだな。」

御坂美琴と白井黒子。二人は彼女たちの友達だった。

とある第三話

「……はあ。」

放課後。退屈な授業から開放された生徒たちは、教室に残りこの後の予定について話している中、一人早々に廊下へと出ていた。溜息を吐いたその顔はまた憂鬱そうであった。

この日も彼とまともに会話しようとするものはいなかった。まるで爆弾を扱うかのようにビクビクとされ、どうしても話さなければならない時は本当に最低限にすましてくる。教師も右に同じ。終いには彼が教室から出た途端、クラスから安堵の息が出るほどであった。

（俺も嫌われたもんだなぁ……。）

昔はもうちょいマシだったはずなのに。とポツリと零す。

だが別に彼はそれに対して溜息が出たわけではない。彼にとってはこの学校の誰かと会話する事がないことなどいつものことだ。その溜息がそのことを全く含まれて居ないとしたら嘘となるがそんなのは今更であるのだ。

「はあ……」

また彼は手元にあるものを見て溜息を吐く。その主たる原因は彼の手元の携帯。未読メールが何件もあり、どれも同じ相手に同じ内容。

『こっちに顔を出せ』

他にも色々と書いてあるが集約するとこの一言ですむ。学校にいる間気付くことができず、返信ができなかったため文面は一通繰るごとにどんどんと荒々しくなっている。相手は相当のお怒りのようである。

コレはまた小言を言われることだろう。

「上条じゃないけど、不幸だ。」

彼はポツリとそんなことを呟き肩を落とした。

第十七学区にあるごく普通の飲食店。そこで彼は食事するでもなく、周りから死角となっている店のドアを開けた。そこには明らかに店の雰囲気に合わない電子ロックの扉があった。迷いなくパスワードを打ち込み開ける。

「漸く来ましたか。もっと早くこれないんですかあんたは。来れなくても連絡するのが筋ってもんでしょう。あなたはそんなことも分からないんですか？それとも私に迷惑をかけて楽しんでんですか、変態。」

入り口が開いて、いきなりの罵声。それに本日何度目かのため息が出た。

ドアの中に立っていた和哉より年上だ思われる女性。ろくな手入れもされていないのだろう長く乱雑に伸びた黒髪を後ろで無理矢理

後ろで纏めており、そのつり目がちな目を待機しており和樹が入ってくるなりさらに吊り上げ文句を言っていた。

「……確かに俺も悪いことをしたってのは思ってるんだが。もっと言い方があると思うんだけど。仮にも一応は俺上司に当たるわけだし。」

いきなりのそのあんまりな言葉に和樹は頬を引き攣らせながらも反論を試みる。しかし、そんな和哉の言葉は鼻で笑って返された。

「っは！人としての最低限な行動も出来ない人が何を言うんですか。あなたが上司だというなら行動でそれを示しなさい。まあ、最も今のあなたを見ると、とても出来そうではありませんが。」

「……」

自分が上司であるといっても逆にさらに言い募ってくる調子。しかも今回は自分が悪いこともあってあまり言いかえせない。そもそもこの女性はいつもこうなのだ。今更何か言ったところでどうにもならない。この女性、自分の身の手入れなどは適当なくせに他の規律に対し手はしょっちゅう言ってくるのだ。
ついでに和哉だけではなくこの暴言は大抵の人間に対しても変わらない。

「まあ、こんなこところで問答していても私の貴重な時間が無駄に消費されるだけですし、奥に行きましょう。そこで今日来てもらった理由も話すから。」

「……ああ。」

無駄とかなんとかいろいろ言い返したいことはあるのだが、言ったらまたうるさいんだろうなあ、と最早確信しながら、とりあえず自分が呼ばれた理由を知るため女性――――仙道飛鳥の後ろをついって行くのであった。

『ライブラリー』それが彼の所属している暗部のコード名だ。

その任務は、何の因果か主に原作の『グループ』と同じ、表では処理し切れなかった掃除及び雑用。

また、これら以外に彼らは上以外にも最優先任務とされているものがあった。それはプランの修正と呼ばれる役割。何のプランなのかは彼らには、一切知らされていない。が、これを彼らが行なううえで最上位任務とされ、彼らが何に変えても優先して行うべきものだとされている。

もちろん和哉は原作を読んでいるのだから、少なくともこのプランが五行機関に関与する物だとはわかっている。だが、それが今後どのような意味があるかまでは知らない。故に自身に対し、害悪がない限りは、放置すると決めていた。

飛鳥に連れられ薄汚れた廊下を抜け、彼女が古錆びた金属扉を乱暴に開け放ったさきには、そこそこ広い部屋であった。そこは左右のドアと今和哉たちが入ってきた入り口以外には、壁が見えないぐらいほど棚があり、中には資料が綺麗に収められていた。部屋は飛鳥が掃除しており机の上はともかく床にはゴミ一つ落とされてはいない。その代わりというように中央に設置された机の上には紙束とファイルがいくつも折り重なるように置いてあり、その机の向かい

に座る二人の人間が彼らは待っていた。

「やっと来たね、リーダー。ずいぶん遅かったね。」

「……」

「ああ、遅くなって悪かったな、ユウ、ハル。」

「僕は別に急いでいるわけじゃなかったから、いいんですけどね。」

「……べ、つに。わた、し、も気にし、てない。」

「それは助かる。」

ユウと呼ばれた少年はだいたい和哉と同い年であった。髪の色は茶。中世的な容姿をしており、一見だと男か女か判断できない。彼は今、机の上に設置されているパソコンを手に何かを打ち込んでいる。

対しハルと呼ばれた少女はまだ小学生の高学年ぐらいである。黒髪でその右目は眼帯に被われており、肌は健康的といえず、白を通り越し少し青白い。彼女は言語能力に支障があり所々つっかえながら喋っている。その彼女は、小さい足を椅子の上で床に届いていない足をぶらつかせながらユウの作業を見ていた。

和樹を含めどいつもこいつも彼らは、ここにいる者たちは真っ当な人生をおくっていない。皆、何かしらの事情がありこの学園都市、その暗部に拾われた者達だ。

「はあ。そんな風にあなた達が甘やかしていたら、また同じことを

するでしょう。」

後から入ってきた飛鳥はあっさりと許す二人の様子に呆れたような溜息を漏らす。

「でも、リーダー、が、遅刻する、の、そうおお、く、ない。」

「ふん。たまにでもすること自体が問題なのよ！」

「まあまあ。リーダーが来たのですから、とりあえずお話を始めてよろしいですか？」

「そういえばなんで俺は呼ばれたんだ？特にすることはなかったはずなんだが。何か仕事か？」

自分のせいもあって、非常に肩身が狭い思いをする和哉であったが、ユウの言葉に救われたような顔をする。それに思わずユウは苦笑しながらも何も言わないで頷く。

「ええ、とりあえず半分はそうです。後ついでに昨夜の報告もですよ。昨日はあまり説明してませんでしたし、聞きたいでしょう？」

「……ああ、聞くよ。」

本来なら終わった事件を今更聞く必要は無かったのだが、気になっていたこともあり任務の前に後で報告を頼んでいたのだ。和哉の表情が消えユウの向かいの席に座る。

「先日の事を起こしたのはブラックハントと名乗るレベル３の電撃使いを中心としたチームです。規模は小さく、主に第十学区を中心

として活動していました。まあよくある不良グループの集まりのような物ですよ。まあ、その活動に“置き去り”を中心とした女性に対する性的な暴行、及び置き去りを研究者などに売り付けたりという少々特殊な物がありましたが……。」

和哉は、そこで湧き上がった嫌悪を心の中で抑え必死に表に出ないよう自制する。

置き去りと呼ばれるもの達は基本誰かの庇護を受けている者は少ない。故に犯罪に巻き込まれやすく、研究所でモルモットにされるなどよくある話だ。だがそれを主軸において動く者は少ない。この学園都市の不良と言うと大体がアンチスキル、レベル０がほとんどだ。そういったものは大体が高い能力を持つ者を妬みそいつらを襲っている。つまり多少はストレス発散程度のはずなのだ。

「この者たちがまだ調査中ですが、何処かから現在絶対能力者進化計画で使用されているレディオノイズ、通称シスターズの情報を入手。警備の穴を突いて、データーを強奪。その際シスターズの一人も回収しようとしましたが、それは阻止したそうです。」

「彼らの位置を特定した下部組織は、一度敵アジトに突入を試みるも肝心のターゲットとその取り巻きは既に逃亡した後で、何人かの下っ端と襲われたと思われる置き去りがいただけ。その後、リーダーに連絡が行き、後はご存知の通りです。まあ、ぶっちゃけ発見してから二十分も経っていれば仕方ありませんが。」

「……ああ。」

「だいたい、そこでもたつかずとっとと突入しないからそうなんのよ。応援なんて暢気に待っているからそうなんの。所詮素人なんだ

から。」

言葉が硬くなる和哉。それにつまらなそうに机上の書類を片付けながら飛鳥が愚痴る。

「まあまあ。彼らは能力者の恐さを知っていますから、不安だったのでしょう。まあ、プロがそれでどうするという感じですが、急なことで装備が拙かったそうですし。」

飛鳥の言葉に苦笑しながら一応ホローを入れるユウ。

「まあ、その後駆け付けたリーダーが置き去りを保護するよう指示し、彼らの尻拭いとしてリーダーが一人で、彼らのことを追い第七学区の廃ビルに追い詰めこれを撃退。ターゲットが持っていたデータはリーダーが入手。……そういえば、リーダーがあそこに上手く陽動したおかげで証拠隠滅が楽だったそうですよ。」

「別に奴らが勝手に人目のないあそこに入ってくれてただけだ。大した手間は無かったよ。」

それよりも続きをと促す和哉の視線にユウが内心で溜息をする。

「彼らがねぐらと使っていた場所で発見し、リーダーが保護するように指示した“置き去り”の少女たちは、壊れており使い物にならないと判断され、下部組織の者たちが上層部の命によって処分されました。」

「そう、か。」

最後の部分で堪えきれなかった様で和哉の顔が怒りに歪む。ユウ

はそのことに気付いていたが、淡々とした口調で言った。ユウ自身はそれに対し同情はあるが、それ以上は特に何も思っていない。別にこの世界では決して珍しい話というわけではなかったからだ。ユウが特別そうという訳でなく、暗部に所属している大半の人間がそうであり、むしろこのようなことに対し一々反応をする和哉のほうが珍しいのだ。いや、和樹も普段はあまり反応したりしないのだが。

どうもおかしいなあ…。と、表情にはださず内心で首を傾げるユウ。

「リーダー。か、お、こわ、い。」

いつの間にか隣で座っていたのか眼帯に被われていない目で、ハルが心配そうに和哉を見上げながら声をかけてきた。

「!?あ、ああ。大丈夫だ。」

表情に出たことに驚き申し訳なさそうに和哉は苦笑する。正直彼も色々と戸惑っていた。いつもは多少はあるとはいえここまで動揺することなどないのだが。

（あの子に重ねてしまったか？そういえば同い年ぐらいだったか…。）

ユウはハルと和樹のそのやり取りを気にした様子もなく続ける。

「しかし、最近多いですよね。何のかかわりも無いはずの者たちが機密の情報を知っている。誰かがリークでもしているのでしょうか？しかし、そのようなことをする利点がないし何よりも、今だ証拠が出ていないのは…。」

彼にしては珍しく周りにも分かるぐらいに顔を歪める。

分かる筈もない。気を取り直した和哉は心の中だけで呟く。何せ前世の知識なのだ。いくら背後関係を調べても分かるわけが無い。さらにそれに拍車をかけるように転生者に対して、記憶を読もうとしても何故か前世に対しての記憶が読めないのだ。これは和哉自身が身を持って体験したことでもあったため間違いない。

結構原作に干渉する奴は多いらしく、彼はアレイスターが計画に邪魔だとした者を排除する任務で、転生者が結構な割合で出てくる。ただ碌な奴がいないようで、中には自分はオリ主だなどと叫んでいる馬鹿もいた。他にもある馬鹿が命欲しさに前世の記憶を何も考えず喋ろうとした者がいたことがあった。いくら記憶を読まれなくてもそういうやつらはこちらの身の安全のための早々に始末などした。

まあ、そういった輩のため色々と実験できたりしたのだが。

アレイスターがもしそれに興味を持ち原作がばれるようなことがあったら、どんなことになるか分からない。何よりも自身の身が危ない。そんな事があったため、なるべく前世の危険な輩は速やかに自分の手で殺している。多少罪悪感も感じるが、だいたい自分が殺す輩は大抵下種なので特に抵抗はない。死人に口無しである。

まあ、何はともあれ結構な人数そういう者は排除してきたので、転生者の人数は何人いるかは知らないが少なくなっているはずである。

「まあ、俺たちがここで考えていても分かるわけないし、そういうのは専門家に任せて今度の任務のこと教えてくれないか。」

和哉は話を逸らすため今回の任務について聞く。それだけではなくこうも続けて任務を言い渡されることや、自分ではなくユウに連絡するというのも珍しく、興味もあった。

「そうですね。ここで考えてもしょうがありませんし。皆さんも聞いてくださいね。」

「ん？俺以外にも伝えてなかったのか。」

みんなに対して呼びかけるユウに、てっきり自分だけだと思っていたので和哉が疑問を浮かべる。

「ええ。本当はリーダーに直接連絡しようとしたようですけど先の任務の時だったので、僕が代わりに連絡を受け取ったのですがこういうのはリーダーだけ知らないというのは、いささかおかしいので黙っていたんですよ。急ぎでもなかったようですし。」

「そうよ。こいつ、私が早く言えって何度言っても聞かないのだもの。」

「こ、ういう、のは、リーダー、を、立て、るもの。」

「……待たせてすまなかったな。」

「いいんですよ。僕が勝手にそうしただけですから。」

結局自分が遅れたことが原因ということで少し気まずく謝る和哉だが、ユウは気にするなと首を降る。

そして、何時までもこの調子では話しが続かないと話を切り出す。

「それでですね。最近、巷では簡単にレベルを急激に上昇させる幻想御手、『レベルアッパー』なるものが流行っているそうで、今回はその調査依頼です。」

「レベルを急激に上げる？」

和哉が不思議そうに言う。

「はい。そのように言われています。」

「なにそれ、そんなのデマに決まってるじゃない。そんなのあれば私はとっくにレベル５よ。」

今まで大して興味なさそうに聞いていた飛鳥が憤りを隠せず手に握っていた書類を手の中で丸めた。飛鳥は過去にレベルを急激に上昇させるための実験に関わっており、そこで相当な悲惨な目にあわされた経緯がある。そのため簡単に上がるということで詳しくは知らないが周りもそのような過去があるということは知っていたので何も言わない。大にしろ小にしろ傷を抱えている彼らにとっては、深くお互いを干渉しないのは暗黙の了解とされているのだ。

「実際、最近バンクと合わない能力者の犯罪が増えているようですよ。それに最近では原因不明の昏睡事件があるそうで、その被害にあっているものたちも幾人か事前にレベルの急激な上昇が確認されたそうです。おそらくこれにもレベルアッパーが関わっていると思われます。」

「わかった。今度からはそのレベルアッパーを中心に行動する。詳しいことは各自で調べるとしよう。ユウはネットと飛鳥は聞き込み、

ハルはいつも通りでな。俺もいつもどおり勝手にやらせてもらうよ。新しいことがわかったら連絡を頼む。とりあえず、ユウは今ある資料を俺に寄越してくれ。」

彼は気付けなかった。何時の間にやらすでに原作がこの時点で始まっていたことに。

とある第四話

ユウに資料をもらった和哉は、その後隠れ家のある飲食店を離れ、そのまま第十七学区にあるファミレスへと入っていった。

彼は暗部の資料に目を通すとき、はては学校の宿題を行うとき殆んどこのファミレスを利用していた。

その為そこに行けば和樹と会えるというのは一部の者では暗黙の了解になっている

ちなみに和樹がそこに通うのは明確な理由や目的などがあるわけではない。強いてあげれば程々に自宅の近くにありコーヒーのお代わりが自由であるくらいだ。

隠れ家として使っているところも飲食店ではあるのだが、せめてコーヒーぐらいは普通のを飲みたい。

あの店は激マズコーヒーをだすということで近所では有名である。

閑話休題

運良く客があまりいなかったため、彼は都合良く一人で座ることが出来た。和哉は、席に着いてすぐ案内してくれたアルバイトだろう少女にコーヒーと軽食にサンドウィッチを頼む。それに少女は元気よく返事を返し、注文を受けた。

店員の後姿を見送りながら、今まで利用してきたが見たことが無いので新人だろうかなどと考えながら、和哉はユウからもらった資

料を挟んだファイルを鞄から取り出した。

別に紙媒体にする必要などもないのだが、そこは和哉の主義というか、よく分からないこだわりのようなものである。おかげでそのために毎回コピーすることになる飛鳥は非常に迷惑そうな顔をしていた。

彼が資料を眺めていると先程のアルバイトが注文した物を運んできた。

それを受け取った和哉は一切れ皿からサンドウィッチをとり齧りながら資料を読み進めた。

（確かに見事にレベルが合っていないな。一人や二人なら考えられなくもないが、これだけいると確かにそんな夢のようなアイテムが関わっているとも考えるか。）

それから三十分ほど経ち、店に大分人が入って空席が目立たなくなて来た。割と多かった資料を読み終えた和哉は、すっかり冷め切ってしまったコーヒーを飲み今まで読んでいた資料について考えていた。

彼がもらった資料には能力の急激な上昇が見られた能力者と謎の昏睡状態に陥っている者たちのリスト、そして世間で流れているレベルアッパーの噂を集めたものであった。

リストの方はかなり詳しい個人情報が載っていたが、想像していたよりもその記載事項の量が少ないことからユウが事前にある程度選別したのだろう。

レベルアッパーに関してはまだ噂の域をでてないようで能力向上の見受けられた者達よりも情報は少なかった。

レベルアッパーが原因であるとユウは言っていたが、実際にはまだそれが関わっていると断定されたわけではないらしい。彼はこの任務の連絡を受けた後、自身で調べたのだそうだ。

その結果、噂であり未確認であるがレベルアッパーなるものが関わっている可能性が高いと考えたらしい。

未確認であるのにそう考えた理由は勘と火の無いところには煙は立たないであるとのこと。

考えを纏めながら、もう一杯コーヒーを頼もうと店に呼びかけようとした。その時、彼の座っている席から影になていて見えない入り口から先程の店員の声が聞こえてきた。

「す、すす、すみません！！只今、大変混雑していまして、す、少し、お待ちいただければ、そ、その。」

「ああ、気にすんじゃねえよ。ただ知り合い挨拶するだけだ。すぐ出て行ってやる。それよりも何でテメェはそんな怯えてんだ？」

「っげ」

その聞き覚えのある声に思わず声を漏らす。自身の感覚で探ってみればその声の主は先程のアルバイトの制止を聞かずにこちらへと向かってきていた。一縷の望みをかけ自分のところに来ないように天を仰いでいたが和哉は自身の“能力”によって自分の席に真っ直

ぐと近づいているのを知り、溜息を零した。

「よぅ。雑用係の第三位。お前、んなところで何してんだぁ？」

「……お前こそ、何でいんだよ。メルヘン野郎。」

アルバイトの少女が慌てて近寄ってきた時に見たものは剣呑な雰囲気でにらみ合うレベル五姿だった。

◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆◇◆

立花佳織。彼女はごく普通の家庭に産まれ、ごく普通に育った一般人Ａと称せるほど普通の少女である。だが、そんな一般時代表といえる彼女は唯一他人とは違うところがあった。

それは自身に前世の記憶があること。

この記憶により彼女はこの世界が『とある魔術』の世界だということを知ることとなった。しかし彼女は死による恐怖心から原作に介入する気は無く、平穏を望んだ。

だが、前世の記憶があったことで周りの子よりも勉強ができ、それを大変喜んだ両親は彼女を学園都市に入れた。当初彼女はそのことを嫌がっていた。彼女は原作に関わるつもりなど無かったのだから。しかし、親が自分のために一生懸命学費を溜めてくれたのを知り、学園都市に行くことを決意する。

別に興味が無かったわけではない。死にたくないとはいえ、人一倍好奇心旺盛と自負する自身にとって、非常に興味深かった。

（原作の人物に関わらなければ大丈夫。）

そうと決まったならとことん楽しもう。彼女はそうやって生まれてから決意していたことにそう言い訳をした。彼女の当時の今にして思えば浅はかとすらいえる考えは、しかし今日まで確かに成功し、彼女は一切原作に関わらず平穏に暮らしていた。

友人もたくさんでき、少し怖いところがあるが、志望した高校にも通えている。何もかも順調だった。これでちょっぴりのデンジャラスなことがあればさらに問題なしだが、多くを望めばそれ相応の報復があることを知っていた佳織は必死に自分を押さえ込んだ。

今日は友人から紹介によって入ったこのファミレスでのアルバイトに彼女はいろいろと張り切っていた。

（それが、何故こんなことに……。）

途中まで順調であったのだ。客の入りが激しくなって少し忙しかったものの、大した失敗も無く、このまま何事も無く終われそうだとすら思っていた。

しかし、それはある一人の客によってそれは崩れる。長身な茶髪で、ヤクザ予備生とホストのようなイメージを抱かせる男。

一目見て記憶が刺激されそして気付く。彼が原作において第二位とされる学園の暗部に所属する垣根帝督であることに。そのような存在をいきなり目のあたりにした普通の少女である佳織が萎縮するのは当然のことであった。

しかも聞けば先にこの店に居た知り合いという客は自身のが通っている学校では最も有名な人物であるレベル５の第三位。登校してすぐに６人の男に怪我を負わせ学校では最も関わってはならない人物と囁かれていた。

自信の知識にない原作との相違点。

自身の知識とは違うレベル５いうことでかなり興味を惹かれたがその噂のため顔も合わさぬようにしてきた。

その男が原作でも、とんでもない戦闘力を誇っていた暗黒物質（ダークマター）を操る男と一緒にいる。

自分と同じ相違点だろう人物。それに恐怖心と、そして押さえきれないほどの好奇心を感じた。

理性では関わってはいけないとまた警報を上げている。だがそれは彼女にとって抗いがったかった。

転生前から人一倍好奇心旺盛であった佳織。彼女が当時死んだのもこの好奇心が原因だった。だから前世の反省を生かし今まで波風を立てず、必死に関わらないように頑張っていたのはずだったのだ。

（少しぐらいなら・・・・・・。）

もしかしたら、そう…もしかしたら彼も自身と同じように転生したとかなのかもしれない。そして彼はどうして転生することになったのか知っている可能性がある。

だから、私は聞く必要がある。

佳織は自身にまた学園都市に来たときと同じように言い訳をする。

「で、お前は結局何しに来たんだよ？」

「べつに、ただそこの窓からテメェのウザッたらしい顔が見えたから、挨拶に来ただけだが？」

「じゃあ、来んなよ。」

すごい個人的な理由でこちらに顔出してきた帝督にひどく鬱陶しそうに和哉が手を振る。だがそんなこと知ったことかとばかり帝督はその意見を無視し、向かいの席に帝督はどっかりと座った。その様子に思わず和樹の口から舌打ちがでた。

「……どっか跳ばしてやろうか、お前。」

「テメェ。あの一方通行（アクセラレーター）のレベル６シフト計画に関わったそうだな？」

またも和哉の言葉を無視し話を切り出す。それにイライラするが和哉は、彼がわざわざ自分に接触したのかを知り納得した。

「…随分耳が早いな。まだ、一日しか経ってないんだが。」

「んなことはどうでもいい。で、何をやったんだ？」

「っん？知ってんじゃないのかよ？」

「たまたま耳に入っただけだ。テメェが関わったぐらいしか知らねぇよ。」

我が物顔で席に座りながら、帝督は軽薄な笑みを浮かべながら、しかしその目は真剣な輝きをともしていた。

知り合った日は短く、浅くはあれど、一度は殺し合い……までした仲だ。和樹は俺に当然気付いた。

（そういえばコイツ。第一位（アクセラレータ）に御執心だったか）

別にここで彼に話してやる筋合いもないわけだが、ここで殺し合いは正直ごめんである。

ここは正直に話してとっとと帰ってもらうかと考えた和樹は気が乗らないながらもその口を開いた。

「また随分と抽象的だな。まあ簡単に言うとアクセラレータの関わる計画のデータを盗んだ奴らがいた。下部組織じゃ手に負えなかったから俺がそれを取り返す。俺は直接計画との関与なし。はい。これだけの話。」

教えてやることは考えたものの詳しく教える必要はない。そもそも話す義理も無いのだから。

「……それだけか？」

帝督にしてもダラダラとした説明聞くつもりはなかったため、特にその説明のしかた自体には文句はないが内容が想像していたもの

とは違ったためつい口が出た。

「他に何があるんだよ。というか何を期待してたんだお前は？」

「いや、テメェのことだ。その計画に関わっている人形を助ける。なーんて、馬鹿なことをするのかと思ったんだが。それとも知らなかったのか？」

「いや知ってる。」

「は、はっはは！なるほど、テメェも流石に手を出せねえか。それだけの理性があったとは知らなかった。」

「別に。俺はお前が思っているほど善人だった覚えはない。」

ブチリとおそらく幻聴であろうが血管が切れたような音が脳内で響いた。

和哉とて原作、そして今この世界で過ごしてきている身としてこの実験はいやと言えるほど知っている。この世界に身をおいて擦れてきているとはいえ、救えればと考えたこともあった。

だが、できない。

それは実験を止める手立てがないというのもあるが、それ以上に大きな理由がある。手を出せば自身の大切なものを失う可能性があるのだ。

（原作どおりなら、半分は上条が救ってくれる。）

それにずきりと胸が締め付けられる。そう半分だけ。身内ではない、だがその実験をもし知ってしまったときの少女の姿が浮かびずきりと胸が痛んだ。

「ああ、そうだったな。貴様も“一応”は悪だったわけだ。自分に関係ない奴までは面倒はみねえか。まあ、懸命だと思うぜ。俺にも勝てねぇ—第三位（半端者）ごときが第一位に喧嘩を売らないのはなぁ。」

「・・・何、勘違いしてんだお前？」

「あァ？」

「俺がお前より弱い？っは！順位に固執してんじゃねえぞ第二位（スペア）！お前が二位にいるのは俺より強いんじゃなく、第一位の“代わり”になるだけにすぎねえんだよ。」

「ふん。勘違いしてんのはテメェのほうだ。そのスペアにすら成れねぇテメェが何を言ってやがる。」

お互いに立ち上がり睨み合う。本来、和哉はこんなに喧嘩早いわけではないのだが、ただでさえ先の“置き去り”や“シスターズ”のことで普段よりもピリピリしているのだ。いくら嫌っていても普段はそんな表だって喧嘩など売らないがそろそろ限界がちかい。

ざわりと店内から音が消えた。二人の間から漏れ出していく殺気に店内にいる人たちは訳も分からず寒気に囚われた。

そんな遺憾がどれ位続いたか。帝督が何かしらの行動を起こすようにてがぴくりと動きを見せた時、

ゴトリ

と近くの机から音が響いた。

「…ッは。やめたやめた。俺は帰るぜ。」

机をつまらなそうに見た帝督はつまらなそうな顔をし席を立った。

「……逃げんのか？」

「随分安い挑発だなあ。逃げんじゃねえ。逃がしてやるんだよ。お前じゃあ俺の相手にならねぇ。それともまた尻振って逃げんのか？」

「……。」

「ああ。そうそう。」

もう用は無いと去ろうとここから立ち去ろうとした帝督は何かを思い出したように振り返る。

「そこに居るネズミ。お前に任せていいんだよなぁ？」

ガクンとまた先程の机が動いた。それと僅かに乱れたい気遣いが聞こえた。それに対し和哉も帝督も驚いた様子を見せない。

その後、帝督は何も言わず店から出て行った。

帝督が去ったのを見て和哉は肩の力を抜く。敵である男に好き勝手言われる有様に自身呆れ、そして気分を入れ替えるように大きく

息を吸う。ふと周りを見渡せば、何時の間にやら店の客は随分と減っていた。

「はあ。そういうことでバレバレだからそろそろ姿を現した方がお互いのためになると思うんだけど、どうだ？」

一拍置いた後、誰も居なかったはずの和哉が座っていた机の近くの床に腰を抜かして震えているアルバイトの少女がいた。

「偏光能力、レベル3ってとこか。すまないけど、俺の“能力”って、その手の能力者に対してかなり相性がいいからさ。まあそれがなくても今回は簡単に分かったけど。」

「こ、殺さないで。わ、わたし、ま、また、死にたくない…」

「……“また”か。一応、聞くけど“とある魔術の禁書目録”という単語に覚えは？」

「……えっ？」

「――なるほど。同胞ってことね。」

その何故と描かれている佳織の顔を見て和哉は納得したように頷く。

最近、接触率高すぎだろうという言葉は辛うじて飲み込んだ。

「ちょっと話さないか。」

席に座って向かいの席を勧める。その先程の帝督と話していた時

と違い笑顔で話す和哉に、ビクビクしながらも佳織も大人しく指し勧められた席に座った。

とある第四話（後書き）

まずはこの作品を呼んでくれた方々。本当にありがとうございます。

さて、ここで今更ながら自己紹介。この作品を手がけさせていただいている垂柳です。以後お見知りおきを。

さて今回この作品は自身の作ったサイトで上げる予定だったものを皆さんの感想、反応をいただきたいと思い、載せさせていただきました。

なので感想、ご意見、ご指摘があれば、是非感想板にてしていただければ嬉しいです。

色々とツッコミどころだらけのこの作品ですが、よろしくお願いします。

とある第４．５話

カラン

と小気味いい音が響くとともにありがとうございましたーと声を背中越しにかけられた。

店を出た和樹は体を伸ばす。

今日は色々とめんどくさいことが続いたと溜息を着く。

帝督と出会ったかと思えば、新たな転生者との接触。これが、ビンゴゲームだったら面倒な出会いが３つ揃ってビンゴだ。

コレでまだ何かあるようだったら今日は厄日決定である。もう今日はすぐに帰って寝る。そう決意したはずだったのだが、

歩きだそうとした足は、目の前の歩道で道に手を付き膝を落としている友人の姿を見て止まってしまった。少し視線を逸らせば、車道に中身が散乱したビニール袋が落ちている。

リーチ。心の中で何かが聞こえた。

関わってはならない。

今日はこれだけ色々あったのだ。もう早く家に帰って寝たい。

だが、根は大分擦れたとはいえお人よしである和樹はよせばいいのに、どんよりとした影を作り不幸だと呟いているその友人の肩に

手を置いた。

「なにやってんだこんなとこで。そんな不幸なオーラを撒き散らして。」

不幸そうな顔が一変。のそりと上げられ、こちらを見たときの彼の顔はまるで迷える子羊は神に会ったのかのようであった。

「すまん。頼むっ。お願いしますっ！どうかこの上条めをお助けください！」

ビンゴ

そこにいたのは、彼にとって数少ない友人と言える上条当麻であった。

「いやー。本当に助かったぁ。車にひかれそうだった人を助けるのに夢中で、気付いたらその人は助かったけど今夜の晩飯が犠牲にーーーー」

「あー、わかったよ。どうせ助けた人っていうのも女の子なんだろ。」

「な、なんで、わかって」

はあ。と思わず頭を抱える。あまりに予想どおりすぎて笑えもしない。

今二人がいるのは和樹のマンションである。

スーパーの安売り商品で揃えた夕食の材料を台無しにしてしまった当麻は、和樹の家で夕食をご馳走することになったのだ。

「ほい。出来たぞ。有り合わせだから味の期待らするなよ。」

「あっ。運ぶのぐらい手伝うぞ。」

「大丈夫だ。もう済んだ。」

「はや！？」

いつの間にか台所に置かれていた料理が、上条が立ちあがろうとしていた時にはすでに目の前の机に並べられていた。

「相変わらず便利だよなあ。……これは、…ラーメンですか。」

「インスタントのな。わざわざ誘ってやったんだ。文句なんていうなよ。」

「い、いえ、いえ！文句なんてとんでもない！ありがたく食べさせてもらいますよー。わー、俺ラーメン大好物なんですよ～。」

微妙な反応を示していた上条であったが、和樹の言葉に慌てて言いつくろい目の前のラーメンを取られまいと急いで齧り付く。

「って、アツ！？」

「はあ。急いで食べるからだ。ほらタオル。」

ちなみに醤油ラーメンであった。

ズルズル

男二人のラーメンが啜る音が部屋に響く。和樹は食事中はあまり喋らない性格であり、それに合わせ髪上も無言でいつも食べていた。

だが、ふといつもどおりの食事だったが、ふと上条が手をやめ口を開いた。

「……おまえさあ。」

「んー？」

上条が話すのを啜るのを止めず、目だけを向ける。

「何かあったか？」

その言葉に一瞬和樹の手が止まった。だが、すぐに口に含んでいたラーメンを飲み込み答える。

「別に。何でもないけど。いきなりどうした？」

「いや…気のせいならいいんだけどな。」

「ん。」

（…ビックリした。）

表情は顔を荷は出さなかったものの内心和樹はかなり焦っていた。

相変わらずそういったことは鋭い。

目の前で暢気にラーメンを食べている上条。今のその姿からは想像できないが、彼が時折みせる鋭さをみせるそれは、まさに前世で見た主人公に相応しいものだ。

自身を省みず他のために動ける存在。あらゆる困難にぶち当たりながらも、それでも前へと進んでみせるその姿。

遠い昔、研究所に押し込まれる前。和哉は彼の姿に憧れた。いや、今もそれは変わってはいない。

さて上条を尊敬していたといえる和樹だが、その出会いは特に珍しい、劇的なことがあったわけではなく、一年ぐらい前今日のように不幸だといっている上条に手を貸した、その程度のことだった。

それが今は友人といえる間柄になっている。彼が財布を落としたと言えば金を貸したり、不良に追われれば手を貸したり、宿題が終わらないとなれば手伝ったり……なんかしてばっかりだが。

とにかくとして上条と和樹はそんな間柄程度には仲が良くなった。

近づきすぎると言うのは問題だ。　最初は打算的な考えから近づき顔見知り程度の付き合いと考えたものが、程度が分からなかった和樹は、気付けば簡単に切り捨てられないほどに近い関係になってしまった。

今俺の知っていることを話したら彼はきっと怒るだろう。それを行っている者たちに、言わず何もしなかった自分に、そして気付けなかった彼自身に。だが結局はきっと俺のことを許す。そう、確信

もあった。

それでも話すことはできない。プランはまだその域に達しておらず、ツリーダイアムも破壊されていないのだから。それに何よりこれ以上原作と乖離させれば、この先どうなるかわからない。

上条の”死”についてもそうだ。なんとかして助けたい。だが表舞台に立ち、それを止めるような動きをすれば、確実にアレイスターに不信を抱かせ最悪敵対することになる。

救いたい、だが救えない。最近、いやずっと前からそのことが胸を締めつける。

とその時頭にあることがよぎった。

もし上条が今”彼女”を取り巻く環境を知り、救うために動いたら。

彼だったら、彼女を、和樹が抱えているものなど簡単に救ってしまうんではないのだろうか。囚われのヒロインを助けるヒーローに簡単に彼ならなれてしまうだろう…。

「ふぉひた？」

「……いや。」

取り留めなく最近上条を見るたびに思うそんな馬鹿みたいな考えを和樹は頭から振り払った。

（？様子が変だ）

目の前でラーメンを啜っている和樹を見て上条も思う。別に何かがおかしい行動をしたわけではない。だが、上条は和樹を見て違和感を覚えた。特に何かあるとはいえなかったが漠然と思った。

正直この学園都市の頂にいるといえる彼が、何を考えているか特殊な力を持ってはいるもののレベル０に分類されている彼にはわからなかった。

彼はあまり自身のことについて話すことはないので余計にそうだ。レベル５の第三位ということも最近知った。

それでも上条は彼のことを友人だと思っている。

いつも何だかんだ言いながらも自分を手助けしてくれる彼に少しでも力になれるのなら手を貸したい。

何か悩んでいるなら話して欲しい。

口に出しはしないものの心の中で考えていた。本当に困っているなら自分に相談してくるはずだ。

（今は考えてもしょうがないし、話してくれるまで待つか。）

上条はいつか和樹が話してくれると、その時はそう思っていた。

とある第４．５話（後書き）

とりあえず上条さんと接触。
ちょっと無理やりすぎたかな？ただここで出しとかないと後がきつそうなので出しちゃいました。

とりあえず必要な回ではありますが、外伝程度の認識でご覧ください。

ちなみに最初に言っておきますが、原作には主人公も絡みます。

とある第五話

「――――初春！残りの野蛮人どもはどこですの？」

『その路地を左に曲がって次の路地を――――』

ジャッジメントに通報があった白井黒子は、今路地裏を走っていた。

一人確保したとはいえ、まだ女子中学生たちを襲ったという野蛮人どもは残っているのだ。一刻も早く確保に急がなければ何をしでかすか分かったものではない。

初春に指示された道を抜け不良達がいるとされる路地に出る。

「ジャッジメントですの！通報を受けて参りました。おとなしくお縄に……って、あれ？」

だが、使命感に燃えていた黒子が見たのは、一般人を襲おうとした野蛮人たちの気絶した姿と、

「お姉様！！？と、先輩方！」

「おう、黒子。」

「……どうでもいいけどさあ、私たちはおまけなのか黒子？」

「ハ、ハハハ…。」

敬愛するお姉さまと親しくしている先輩たちだった。

「いやあ、やっぱり美琴は強いねえ。あんたと居れば襲われようとも安全に登校できるわぁ。」

「そんなことおっしゃっている場合ですか！まったく。お姉さまは黒子が駆けつけるまでお待ちくださいと、あれほど勝手に立ちまわれたら困りますと申していますのに。」

「黒子ちゃん落ち着いて。ほら、私たち美琴ちゃんのおかげで助かったんだから。」

「っぐ。た、確かに由愛先輩の仰るとおりですが。・・・しかしですね。一般人が無闇矢鱈に能力を行使するということは…」

「だって、しょうがないでしょう。あんた達が来る前に終わっちゃうんだもの。」

「美琴ちゃん強いからね。」

「それでも！――――」

いつもの登校風景。美琴に対し黒子が小言を言い、それを直海が笑いながら何かを言い由愛が諌める。それが四人のいつもの様子であった。

こんな日々がずっと続けばいいのにと一人直海は思う。

亜dが現実は悲しいことに待ってはくれない。明日かもしれない

し、来週かもしれない、それがいつかはよく分からないが、それでも確実に始まりの時は近づいている。

そんな風に珍しく感傷なんてものにふけていたからだろうか彼女は、そのために次の行動を止めることが出来なかった。

「――――――最先端科学とか何だと謳っても……。」

ズドン！！

過去に見たとある科学を思い出そうとカコに思いをhせようとしていた直海は突然の物音に目を白黒させたが、その音が、美琴が自動販売機を蹴った音だと気付きサァっと顔を青くした。

「み、美琴ちゃん、流石にそれはちょっと…。」

「そうですわ。お姉さまったら、またそんなスカートの下に無粋なお召し物を。」

「あ、あれ？私と言っていることとちが…」

「お、おいぃ！！お前ら言ってる場合か！こんなとこで、そんなことしたら警備ロボが来るでしょうが！」

暢気に会話している黒子たちに直美は叫ぶ。

「確かに考えてみれば、そうですわねえ。それでは、失礼して。」

黒子もそれに、というよりも言っている傍から出てきた警備ロボに気付き、すぐ向かいのビルの屋上にテレポートする。

「へ？」

直海だけを残して。

「ま、待て、く、黒子ぉ！！何で私だけ置いていく！！！」

「あいにく私のテレポートは二人までが限界ですの。お姉さまと由愛先輩の二人で重量オーバーですわ。」

「御坂が原因なんだから、御坂を残せばいいでしょう！！」

「私がお姉さまを見捨てるわけありませんわ。」

「私ならいいのか！！」

「なおちゃん、ごめんね。」

「ほら、来たわよ！」

「鬼、悪魔、あんたら覚えてろぉ！！」

最後に捨てゼイフを残し、直海は迫ってきていた警備ロボから、普通の人間では出せない速度でその場から走り去っていった。

「……さすが直海先輩。土煙が出ていますわ…。」

「さすがに速いわねえ。」

「なおちゃん大丈夫かな？」

「大丈夫ですわよ。ああ見えても雨桐先輩は『肉体強化』のレベル3。脚力の強化だけに絞ればレベル４の出力。あれぐらい簡単に撒けますわ。」

何だかんだで彼女たちは直海を信頼しているようである。

「あら、いけない。そんなことよりも急ぎませんと。」

黒子飛んでいる気球の画面に映っている身体検査実施校という告知を見て言う。

「え？あ、そっかシステムスキャンの日だっけ。」

「はあ。私、今日自信ないな。そういえばなおちゃんあんなスピードで走ってちゃったけど、検査大丈夫かな？」

「大丈夫じゃない。あいつ体力馬鹿だし。」

「そうですわよ。タフネスだけでいったらお姉様以上にあるお方ですし。」

「う～ん。言われてみればそっか。」

まあ、その美琴たちの信頼を本人が喜ぶことはないだろうが……。

「２５歳、身長１７８ｃｍ、体重７６ｋｇ、血液型Ｂ型、無能力者。…ただ足の筋肉が一般のものとは差異が見られます。」

由愛が目の前に立った男性をいつも以上に無機質な目で捕らえ、頭に浮かんだ”その男の断片的な情報”を言う。上げられていく情報に目の前の男がギョッとした目で由愛を見る。

「自転車競技の選手よ。他の人と足の筋肉の突き方が違うのはそのためね。」

今この時間、常盤台中学は能力検定の時間だ。他のところでは何人かの似た能力者を集め教室やグラウンドで検定を受けるが、由愛だけは独りこの教室で彼女個人に当てられた教師とともに受けていた。今この教室は入れ替わり、入れ替わり入ってくる様々な人が、由愛の前に立つという異例の空間が出来ていた。

「ーーー次。入ってきて」

教師の声に従い出てきたのはこの学校にいるはずのない学ランを着た生短髪の生徒だ。由愛はその生徒に静かに目を向ける。

「16歳、身長170cm、体重52kg、血液型A型、能力は念動力推定レベル2。右足を負傷中。あと、女の子です。」

「正解です。身体計測能力値（メンタルトレース）はレベル3ってところね。断片的な身体データはかなりの精度で見られるようになったわね。データはあなたのしかないけどツリーダイアムによると貴女の能力はまだ上があるはずよ。頑張ってちょうだい。」

次々に当てられる個人情報にギョッとする男子、いや男装生徒。それに教師は満足そうにしかし内面では溜息をつきながら由夢へ頷いた。正直彼女はこの少女のことが苦手であった。何をしてもこの少女の表情はピクリとも動かない。可愛げのない子というのがこの

教師の最初にあった時の印象であった。

「……はい。」

今だってそうだ。この少女は表情を変えることなくその無機質な目でこちらを見てくる。その目も教師を嫌がる、いや不気味な印象を抱かせた。何の感情も込められいないように感じるその目を見ると彼女の能力の所為か、こちらの何もかもが見られているような気がした。上からの指示がなければできれば一緒にいたくない。

上に提出データを纏めながら再び、今度は口から溜息をつきそうになった時

ゴドッン！！

と轟音が校内に響いた。

教師があまりの轟音に驚き辺りをキョロキョロと忙しなく見回す。

由愛はそんな教師の様子を尻目に窓から顔を覗かせた。再び轟音が上がり、由愛の見ている前でプールの水が大きく跳ねた。

「コレは美琴ちゃん？相変わらずすごいなぁ・・・・・・。」

そういう彼女の顔は教師からは生憎見ることは出来なかったが、相変わらず無表情でありながらも楽しげに見えた。

「相変わらず派手だなぁ美琴は。さすがレベル５ってとこか。ありゃあ化け物だわ」

その頃同じくグラウンドで直海が轟音をたてているプールを呆れながら見ていた。轟音に続き、上がる水しぶきはそのすさまじい威力を物語っている。

「だけど――」

ふと何の気もなしに後ろを振り向く。

「普通の人から見たら私だって十分化け物か。」

必死に遥か後ろから走ってくる少女たちを見ながらポツリと零す

『記録１００メートル５秒。脚力の強化による能力レベル４。――総合レベル３』

横にたっている教師が持っている計算を終えた機材から電子的な音声が響く。

「なかなか能力上がらないなぁ。」

「おまえの場合は腕力だ。もっとそこに集中して取り組みなさい。」

「へーい。」

「はぁ…。本当に聞いているのかしらね。脚力だけならレベル４なのに。あなたみたいなケースはなかなかいないわよ？」

「どうも」

「誉めてないわよ！」

肩を怒らせながらシャワーから出た美琴は中にいる二人を置いて外に出る。セクハラを働く後輩を待つ義理もないし、自身の体を見せ付けてくる友人を待つ義理などない。…一年前までは同じくらいしかなかったはずなのに何故一人だけ一部急激な成長をしているのだろうか。

ブツブツと肩を怒らせながら着替える美琴に話しかける勇気があるものはいない。そのまま彼女は一人で更衣室を出た。するとそこにもう一人の彼女の友人がドアの横の壁で暇そうにボーっと視線をやっている由愛を見つけた。美琴は彼女の肩に手を置く確かに多少イライラしてはいたが、それで友人を無視するような真似は彼女はしない。中にいる二人は待たないが。

「お疲れさま。」

「！？っあ、美琴ちゃんか。お疲れ様。シャワー浴びてきたんだ。」

それに一瞬ビクリと体を震わせた由愛だったが相手が尊だということに気付き態度を軟化させた。

「プールの水が跳ねてきちゃってね。すっかりビショビショ。相変わらずめんどくさいったらありゃしないわ。」

「ははは。ご愁傷様。」

「そういえば由愛は浴びてこないの。黒子の馬鹿と直海のアホなら中で会ったけど。」

「その様子だと何かあったみたいだね……。」

どこか苦々しく話す美琴をみて苦笑いをする由愛。それに先程あったことを話そうとして、ふと視線をある一部に目を向ける。そこには直海ほどではないが自身よりはありそうであった。

「お前もかぁ！？」

「な、なにが？」

いきなり謂われもなく叫ばれれた由愛はおどろき少し体を引いた。

「っは！いや、ごめん。なんでもない」

「どうしたんですのお姉様？いきなり奇声などあげて」

「そうだぞ、美琴。少しみっともないぞ」

いつの間にか更衣室から出てきたのやら、黒子と直海の二人が奇声をあげた美琴を宥め賺そうとした。

「あ、あんたたちのせいでしょうが！！」

「お姉様！？」

「っちょ！？それはシャレにならんって」

その二人の行動に羞恥と怒りに震えた美琴は、自身をこうさせた諸悪の根源に電撃を放った。

「みんな、ここ入り口だから・・・」

必死に宥めようとする由愛に、されどその声は三人は届かず、その後何かとんでもバトルに発展しようとした。

が、常盤台中学の誇る寮監に締め落とされることで幕を降ろすこととなった。

その後。何だかんだあって、どこかに行こうという流れになり、四人は学園の外へと出た。

近くで見かけたクレープ屋によった四人はそこでクレープを3人分買った。

「あれ、黒子食べないの？」

由愛と直海がクレープを頬張る中、一人だけ購入していない黒子を見て美琴が声を掛ける。

「…いえ、私は警邏中ですので……」

「ああダイエット。」

「っう！？」

「おやおやぁ。黒子さん、ダイエットですかぁ？そういえばシャワーの時チラッと見たけど、下腹の方が以前より緩んでましたね。」

「っぐ?!そういう直海さんこそ、この前体重計に乗って溜息をついてたんじゃありませんの?」

「っつ!?だ、大丈夫だもんね。私の場合は黒子たちと違ってここに付きますから。」

「…ちょっとそのたちってわたしも入ってないでしょうね?」

胸を指し示す直海に、悔しそうにする黒子。二人が火花を散らしているところ、指を顎に当て二人を見ていた由愛が口を開いた。

「二人の体重、ウエストは……」

「「やめぃ!!!」」

「……あ、白井さん。御坂さんも。……こんなところでなにやっているんですか?」

そんなことをしているところで大きなマスクをつけた初春が声をかけた。

お互い初対面であった、直海と由愛、初ハルがそれ添え路田外の自己紹介を済ませ、ここ最近起こった事件や美琴のちょっとした豆知識を披露したとき、ふと初春が何かに気付き声を上げた。

「あれ?」

「ぅん?ふぉかひた?」

何かに気付いた様子に口一杯にクレープを入れながら直美が聞く。

それに、はしたないと美琴が頭を叩いた。

（この人、本当にお嬢様なのかなぁ・・・）

「あっ。い、いえ、あそこの銀行。なんで昼間なのにシャッターが閉まって――――」

それを見てお嬢様に憧れを抱く初春は思うものを感じながら銀行を指さす。と、その瞬間

ドガァアン！！

と本日何度目かの轟音が響き、閉められていたシャッターが爆発した。それと同時顔を隠した男たち銀行強盗だろう3人組が飛び出てきた。

「わおー！銀行強盗発生。さすが美琴。主人公を張ることだけのことはある。よく事件に巻き込まれるね。」

呆れたように美琴を見ながら直海が言う。こうも立て続けに事件が起こるものだからすっかりこういったことに対し驚かなくなってしまった。

「訳のわかんないこと言ってる場合か！」

「とにかく初春は怪我人の有無を確認。お姉様たちはここにいてください。」

「はい。」

「えー。」

「美琴ちゃん少し自重しようね。」

「ッう！？わかったわよ。だからそんな目で見ないで。」

「ックックク。美琴さん怒られてしまいましたね。」

「うるさい！！」

「まあまあ。お姉さま方落ち着いて。お姉さま。ここは黒子めに花を持たせてくださいませ。」

漫才を始める美琴と直海をいつものことと割切っている黒子は、事件現場へと向かった。

完全に舐めきった様子で襲ってくる巨体の男の突進を軽くかわし、その腕を掴んで華麗に投げ技を決めた。巨体の男の体はそのままガードレールにぶつかり動かなくなった。

「おー。」

「っま。あれぐらい当然ね。」

その様子に歓声を上げる由愛と当たり前といった感じで見ている美琴。

（あれ、この光景どこかで…？）

そして同じように二人の横で見ていた直海はどこか妙な既視感を抱いた。どこか遠い昔に見た記憶。

そんなことを考えている間に黒子は二人目の男に跳び蹴りを決めていた。

三人目の男はさすがに慌てたのか、急いでこちらに向かい

「っと」

美琴にぶつかり車に逃げ込んだ。美琴の食べていたクレープを彼女の服につけて。

ぷつん。と何かが切れた音が聞こえたような気がした。

「――あー。なるほど…。」

美琴の手から宙に上げられたコインを見て確信する。

「今日だったのか…。」

落ちていくコインは美琴の手元へ来て、すまじい速さで放たれた。それは最早視認さえ許さず、光の閃光がよぎり、瞬間美琴の直線上に走っていた犯人の車が文字通り宙返りした。

「……ははは。外伝開始ですか…。」

それを見て力が抜けたように直海は呟いた。

これが始まり。今までとは違い世界の難易度が凄まじくあがる。

最悪死ぬかもしれない。

（・・・それでも）

美琴の友人なんてしている時点でこんなことになるのは分かっていたのだ。

自身の知っていることなど僅かでしかないがそれでも何とかしていこうと気持ちを入れる。

「中の人大丈夫かな？でてこないけど・・・」

そうやって気合いを入れ直していたとき、横にいた由愛の心配そうな声が聞こえた。

「？」

おかしい。曖昧である知識だがこの後に何かあった覚えはない。普通に犯人が捕まり終わりだったはずだ。

「誰もいない！？」

由愛と同じく誰も出てこないことを不思議に思った黒子が車の中をのぞき込み驚きの声が上げった。

「へ？！」

その言葉にいやな予感を覚え、直海も駆け寄りその後を美琴が続く。車の中を確認するとつい先ほどまで人がいた痕跡があるにも関わらず強盗犯の姿がない。

「一体どこに・・・」

「あー、すまない。余計なことしたみたいだ。」

驚きに顔をしかめていた3人に申し訳なさそうな声がした。

声のした方に視線を向けるとちょうど彼女たちがいた反対の道路に気まずそうな顔をして脇に強盗犯を抱える青年がいた。

「なんですの、あなたは？」

いきなりの男の出現に身構える黒子。その僅か後ろでは名乗ろう美琴がコインを取り出す。先の強盗たちの仲間の可能性があるのだから警戒して当然だ。

それもこちらに気づかせないほどの能力行使。間違いなく高位能力者。

「待った、待った！怪しいもんじゃない。何かコイツが車に乗り込んで君たちから逃げようとしてたんで捕まえただけだ。」

警戒されていることに気づいて慌てて両手を上げて無罪を主張する男。その際にドサリと落ちた強盗犯はスルーしておこう。ちなみに気絶していた。

「・・・ご協力感謝します。差し支えなければ名前と身分証明書を提示いただけませんか？」

警戒は解かないもの無害を主張する彼にやや態度を軟化させる。

「俺の名前は」

「和樹君！！」

「由愛？なんでここにおまえがいるんだ？」

名乗ろうとした男、和樹を車の影からでてこちらを確認したことで気づいた由愛の声に驚いた。

やいのやんのと騒ぎ出す者たちに一人加わらず茫然とした顔で直海は目の前の青年を見ていた。

彼女の知っている未来ではありえないはずのイレギュラー。

彼女が知っている未来に早くも輝が入った。

とある第五話（後書き）

ちょっと、手抜きになってしまったかんが…。
時間があるときに修正していきます。

…それにしても初春がちょっとしか出ていないけどどうしよう

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1925q/

とある科学の世界改変

2011年10月7日20時54分発行